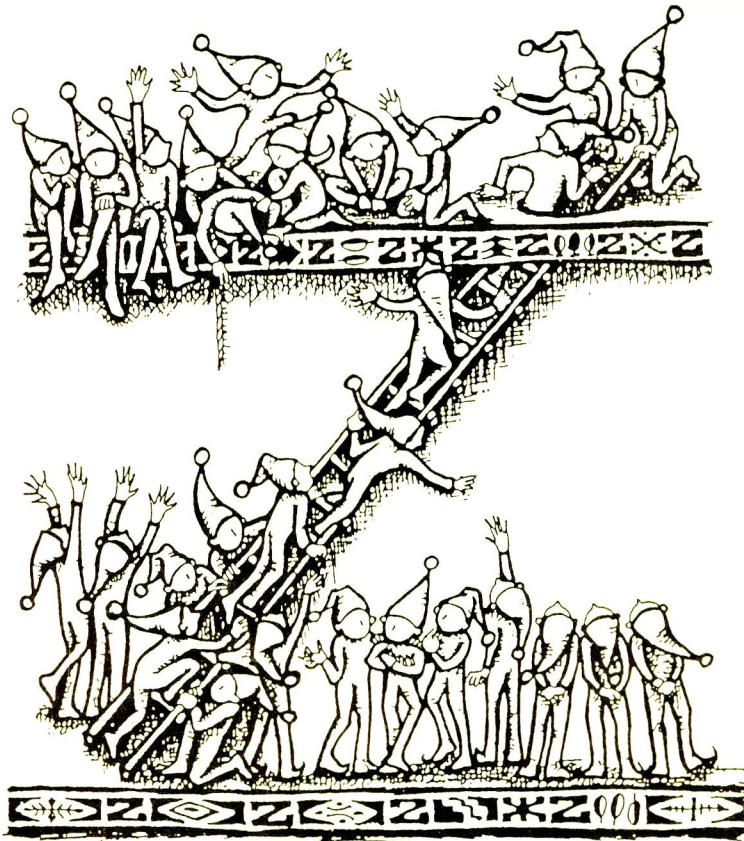
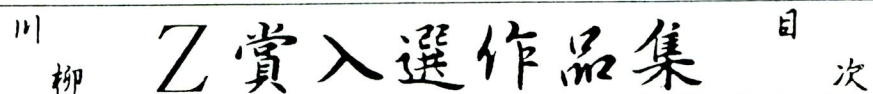


第 16 回

川柳 Z 賞入選作品集



Z 賞選考委員会



18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
坂東乃理子	樋口 仁	大谷 晋一郎	福力 明良	梅崎 流青	岩崎 眞里子	徳永 政二	山本 礫	宮川 蓮子	峯 裕見子	板東 弘子	広瀬 ちえみ	なかはら れいこ	島 道代	西 秋忠兵衛	柴崎 昭雄	木本 朱夏	清水 かおり
加古川市…10	四日市市…10	高松市…9	岡山市…9	柳川市…8	黒石市…8	守山市…7	京都市…7	新潟市…6	大津市…6	香川県…5	仙台市…5	名古屋市…4	青森市…4	八千代市…3	青森県…3	和歌山市…2	土佐市…1
36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
糸原道夫	佐藤 美文	横澤 あや子	姫乃 彩愛	普川 素床	吉田 三千子	戎 踊兵	伊藤 紀子	鎌田 京子	高鶴 礼子	立原 みさと	渡辺 和尾	本多 洋子	辻村 みつ子	情野 千里	高田 政旗	渡辺 裕子	白藤 海
堺市…19	大宮市…19	八戸市…18	豊中市…18	市川市…17	名古屋市…17	青森県…16	苫小牧市…16	仙台市…15	和光市…15	土佐市…14	愛知県…14	松原市…13	岡山市…13	姫路市…12	札幌市…12	北海道…11	西宮市…11



第十六回大賞

土佐市 清水 かおり

夜をかけて心臓の位置覚える木
少年を注ぎたす駅に水匂う
息すると壊れるよ紺碧の箱
百本の薔薇に吊され夜話を
眼球は無傷 少女はあやかしに
ひまわり倒すとき忘却の腕へ
背景は遙かなる父 黄の葡萄
蝶蝶死 淡い脅迫みつめいる
青い絵の中で青溶く王に逢う
呼び合うて茨の皿の分かちどき
錆びた魚から昇る約束の斜面
起きてくるナイフ此岸の雨音に
青々と首捧ぐためだけの明日
月柱さみしい人は車座に
兄を呼ぶ橋の向こうに降る黄砂

薔薇たべて食べて褐色の骨になる
ガラス器抱いて肉体に夏至のごと
誰を壊そうか菜の海のたくらみ
両頬をはさんで ひそと空の話を
孤を掲げわれら夏色の文休
展翅する父兄夫の腕きあばらを
月下る者来て水輪広がりぬ
死後の火に叢書 少年が生まれる
永遠と書くゆうぐれもかりうども
解き明かすまで藤棚の露の下
鱗流れる川面 抱かれに帰る
てのひらを上にして待つ雷花の粒子
発声の亡父その蹠に影展く
風の中 自画像は美しい笑み
それからを海につなげたまま聞く

54	石田 寿子	四日市市……28
53	榊原 れい子	姫路市……28
52	桐越 千繪	北海道……27
51	岡見 阿衣	水戸市……27
50	福井 桂香	和歌山市……26
49	長井 すみ子	福岡県……26
48	野々 圭子	和歌山市……25
47	加藤 正治	名古屋市……25
46	高橋 蘭	札幌市……24
45	東川 和子	伊勢市……24
44	竹内 すみこ	松江市……23
43	あべ 和香	花巻市……23
42	佐藤 幸子	札幌市……22
41	渋谷 美和子	新潟市……22
40	島田 小吉	東京都……21
39	斎藤 茂生	青森市……21
38	岩間 トキ	網走市……20
37	みとせ りつ子	高松市……20

55	驚谷 美津子	秋田市……29
56	中嶋 ひろむ	大津市……29
57	斎藤 はる香	小樽市……30
58	笹田 かなえ	八戸市……30
59	山本 忠次郎	東京都……31
60	大橋 政良	砂川市……31
61	野村 禎子	北海道……32
62	福井 陽雪	青森市……32
63	大熊 純三	西宮市……33
64	山本 三香子	高知県……33
65	岡本 恵	水海道市……34
66	天谷 由紀子	鯖江市……34

想と感覚のひろがり求めて	細川 不凍……37
選 後 感	吉田 健治……38
選 後 評	酒谷 愛郷……39
自らの牀に刻み込む作品を	
一句の広がり収斂	佐藤 岳俊……40
川柳の夜が更ける	岡田 俊介……41
ある選後感	寺尾 俊平……42
選 後 感	片柳 哲郎……43
蒼 天	八坂 俊生……44
炎を抱いて	清水 かおり……45
選 考 結 果	木本 朱夏……45
歴代選考委員	……46
	……48

Z賞は今世紀の究極の扉
橘高 薫風……35
抜群のセンチビリティ
尾藤 三柳……36



第六回風炎賞

和歌山市 木本 朱夏

夢を食べ尽くして猿は不眠症
生き恥の赤を曝して柘榴の実
夏椿すこし黄ばんで生きのびる
ひまわりの丈おとうを思うなり
スリッパに籠もる微熱に立ち暗む
猫の目に春のランプが点つても
手の中の螢を放し髪を梳く
押し入れに翼を隠し惹きさむ
夫婦茶碗に三角波が立っている
時刻表聞じると海は消えていた
哀号と身を細うして百済仏
千羽鶴水の底から浮いてくる
殉教を見届けている黒揚羽
ゴルゴダの丘へも続く石畳
バテレンの足音うしろから時雨

旅人として黙禱の群の中
黙示録の二頁から稲光
青銅の壺の口より眉の月
虫籠に巡礼の鈴鳴っており
教会の扉はいつも開いている
ありふれた今日をくるとフライパン
逆さまに貼った切手で秋が着く
左手を庇う右手のあり ひとり
あかつきの夢に母を歌いけり
前世からの腓返りをひきずって
綾取りの指のすきまの狐雨
夕焼けが始まる父の猫背から
したたかに由緒正しき馬の骨
生きているだけで切ない腕時計
逝くときは野に在る花を食べ尽くす

青森県 柴崎 昭雄

春の樹もわれもはげしく産声す
出陣や花芽草の芽身にまとい
灯台へ体もろとも青くして
少年の眉毛あくまで一文字
北に生まれん さても荒々しきさくら
枝たわわ灯りも夢も太き骨も
生誕の五月の枕はじけるはじける
菜の花の深きところにコメディアン
翳りなき野に並びたる姉の雛
産声よ蔓いっぽんに兄よ姉よ

逝る血よ この血はいつか父が流した
茶漬け食うひとりの海をゆらしつつ
両手さらして置いてけ堀は晴天なり
たてがみや闇をいくつも抜けてきて
筆点滅父も少年われも少年
受話器の母の空は晴れたかサボテンの花
ほうほうと月下をゆくは解体屋
寒月白し いざ嘶いてみせようか
病室に凜と立ちたる葦の刻
父も子もさてもけもの形なりをして

錠剤を飲み込む喉のサンバかよ
雨鳴るやひとつの恋を口ばしり
両の手に絵の具かかえて恋するや
全身を風に晒すと冬の笛
父の髭剃りがこれほど重いと
冬木立耳を澄ませて果てなき道化師
雪こんこん寝太郎ひとり青のまま
骨あおきま再起せり二月雪
どこまでも晴れ一族の貌の輪郭
菜の花の家族もろとも笑い講

八千代市 西 秋 忠兵衛

たまご売りましたしい売りとすれちがう
肉体をつれてベンチに腰かける
コーヒー飲む禽の器官を亡くしつつ
痛いからわらう私の鉄飯面
セロハンが炎えた ダイアナ妃が死んだ
春の靴死者も生者も音たてて
鈍行でもっと明るい方へいく
系累や納戸で時計ひとつ打つ
君がきょう来る千葉県が晴れている
政局の肩胛骨が落ちていく

本日も妻を浅瀬へ捨てにいく
春一番こんなところに棒がある
抜歯の痕冬晴れ とおいへリコプター
それぞれの男のなかの滝の音
いっぽんの柘榴は青しチェ・ゲバラ
縊死体まで巻尺で五メートル
親戚のひとりが死んだ 室内楽
遠足の五〇年後の葬の列
火葬場の時計は狂ったことがない
冷蔵庫灯れり十二月八日

キリンの首もう四時ごろと思っている
保険夫が自分の影を打つ秋だ
身のある方に記憶を抱いている蜆
肉眼で見えなくなった労働者
沖縄の胸の高さにバリケード
いまぼくに食べられてはいるごはんつぶ
誕生日の二軒となりの銃砲店
胃ぶくろがひとつ男がひとりいる
受話器を置くと冬が来ていた
あらう秋ね そうだよたまごっちの少女

青森市 島 道代

風船を飛ばし尽くして雪おんな
糸切れて生家は冬の陽炎に
罅割れた壺を繕う冬の雷
受け止めて毬も私も雪の枷
ひとひらの雪と転んで花と転んで
紅鬼灯^{べにまぼろし} 吹雪の夜を点さんか
這い出せば周りは霧の緞帳に
ブランコの宙返りして散り残る
くぐり戸を一枚抜ける春の手花火
草木染めころろを春の野に晒す

石段に花びら散らす遊びして
花吹雪ゆびすり抜ける人の死も
生き生きて埃まみれの花衣
誘導ベル牡丹は緋に咲かんとして
草苗の狂って久し菜の花忌
夏風細りゆく手を翼にして
辻ことの風に縋れば草いきれ
炎をくぐる独楽追いかける妹と
交差点濡れては辿る花の寺
母の壺子の壺 風の散らすもの

葡萄ぼろぼろ家族のきずな枯れてゆく
水乞いの行く先々の曼珠沙華
萩の雨顔を無くしたまま歩く
落日に縋る病母も枯れ菊も
巡礼の合唱で待つ月白を
どの花を咲かせてみても湿地帯
かえり花薄い日差しを掌に掬う
冬を流れる遠い半鐘聞きながら
朱の実もころんで雪になりゆくか
泣き顔も名画とならん冬茜

名古屋 市 なかはら れいこ

春風や触れて離れる人の指
街中の携帯電話が鳴る 桜
櫓から櫓へ道を問うように
目覚めれば春の弦楽四重奏
春暁や青き獣のあとを行く
足音をゆるくつないで眷属よ
おとうとの影には薄き青混じる
新聞紙展げる 暗い暗い海
舟を折ろうか 黒のいろがみ
ロッカーの奥の白鷺棲息地

コピー機が一瞬光り私の死
金色の魚膝に来る通夜の朝
洋梨の匂い 留守番電話から
傷口も蛍光色で君らの宇宙
夜の滝いままうしろを振り向けば
靴下が脱げそう夜の遊園地
奥の間で鉄を使う音 雨ね
かっこうの嘘だと思ふ傘開く
私たち微量の花粉撒きながら
桃・桜そしてあなたも飛び出す絵本

仙台市 広瀬 ちえみ

ふふふふ音の栽培フフフフ
ビニールの木に水をやったら笑ったわ
薄雪を纏いコホンと咳をする
我慢してつける倉庫に残る足
あさっての暗い所で発芽する
甘くなった首からもいでゆくんだよ
白昼の中に逆さに置かれたり
皮膚色の糸で手足を修理する
歌声にひっそり錆が広がらぬ
ふつつかなマーガレットをさしあげる

想像のテールに並べる果実
いつ火事になるかわからぬ家に住む
お昼どき虫をシャリシャリ齧りおり
誰もいない部屋で入道雲を産む
頬被りして博物館を脱走す
生臭い魚が通って行った廊下
叱られる夜啼く鳥を連れて来て
ぼんやりと食券売場に並びおり
昔から木馬ですつと待っていた
舞台裏に潜水艦が来ていた

断崖に簞笥・鏡台並べせる
一家して片付けにゆく墜落機
ニワトリの声で電話に出てみたり
触角と触角でする会話かな
おさかなを口にくわえて逢いにゆく
リボン結びになつていた甘い日々
先に寝る肉をひと切れ残し置き
帽子の中にももの耳を押し込める
割箸を架けて「渡って来い」と言う
馬が来るまでもみじ吹雪を見ているわ

香川県 板東 弘子

秋霖の森を潜って来た木馬
森の深さを計ってはみる炎を抱いて
篠懸けのそこら明るい月の暈
花野までの距離へ緩んだ風溜まり
漁り火を 蒼々と佇つ女の譜
船は出てゆく寒月の飯茶碗
木を抱くように抱かれて風を聴く
真夜の音 落ちゆく辺り枯野かな
昨日の距離を静かに濡らす小糠雨
錠剤ころろがす吾に射しくる月の光

月光や膝に祈らば風の櫛
セコンドの音する父の野は枯れて
夢の花野は憎しみばかり咲き競い
髪を梳く昨日を遠い罪にして
打ち橋を渡り終えた狂女かな
岬で待つ八瀬を分けてくる神を
千体仏のひとつと契る紫ランプ
荒れ野の中で回り続けている時計
やがて発光 野晒の魂も
てのひらの線を辿って来た西日

真夜中の秒針を聴く枯木いっぽん
雑木林へ微笑む赤い銀の鶴
少うし迷うてたんぼの絮を吹く
草のペン風のそよぎを見ていたり
何に愁う秋の羽音は戯画の中
草笛を振り向く何時まで亡父の呼吸
晩秋の深みでほろほろ泣くな磨崖仏
鏡の裏にいつまで雨は降りつづく
帰らない船一隻へ火を焚けり
シルエットを燃やす青葉の道化師よ

大津市 峯 裕見子

つらぬいてゆくとき削げる両の耳
 どうしても浮きあがるもの手で押さえ
 饅頭買う列か死にゆく列か
 声に出して言つて私のものにする
 母はまだシミーズと呼ぶ春の風
 飛び散つたものをかっこ悪く拾う
 ささ波が来てささ波をつれてゆく
 じゅんさいをつまみ損ねていてこの世
 父が居そうな月の夜の製材所
 やがて包丁カステラの芯を切る

盆踊り姉の尻尾を踏み続け
 胸に背にまぶすきしきし鳴る粉を
 ひとながれの布団を波の上に敷く
 月ひとつ連れてお嫁に来た私
 近寄つて気づく小鳥にあるまじう
 井戸の蓋割る秋天を映すため
 あんただよあんたくすくす笑うなよ
 消えかけた名前の上に書く名前
 滝になりそうな私のくらがり
 松ぼっくりの乾きかげんを掌にのせる

母がいる円く窪んでいるところ
 桃の花に負けないほどの声を出す
 一升枀からこぼす一升五合かな
 罵倒する 声の調子はとてもいい
 呑みくだすための力をたくわえる
 ひやりとする猫が残していった影
 落葉焚き男の声が焦げている
 港までゆらゆらあの世までゆらゆら
 楽になった 晩秋の虫になった
 やわらかいものをたくさんありがとう

新潟市 宮川 蓮子

モノクロのさくら吹雪よふた七日
 あずき粥あたしを置いて逝きんさつた
 おんなとは日毎によそう白い飯
 旅終る はたと音止む殉教者
 遺されて匂いのしない時を抱く
 『ハイ』と答えて振り向けば闇
 兵馬俑これはまぎれもなく妻だ
 君は彼岸へわたしは未だ露にまみれ
 身の内に以来真紅の雪が降る
 次次去つて見事に何も遺らない

累累と漬物桶に女の負
 忘れ風鈴夏の記憶は水びたし
 昏れそうで昏れぬ女の喪の長さ
 野原茫々ひとりの膳に降る水雨
 かんらんかんらと柘榴が悪をそそのかす
 花の血を抜くやも知れぬわたしの夜叉
 冬の蠅動かず狂気貯える
 続編でおそろくバラは気絶する
 死に場所を求め続ける現住所
 懊悩のこの一服が盛れないよ

いろどりも自己満足よ佛の膳
 一合の米研ぐしたたかきとは女
 落ちない口紅しらしら女喪を抜ける
 毎日が日曜 虹たたんでは伸ばしては
 愛すべき嘘が聴きたくなる月日
 目薬よ憎いジョークに感謝して
 不謹慎な鳩らと遊ぶ一周忌
 美酒は琥珀か……トラウマが溶ける
 三彩の馬でもうじき逢いに行く
 葬のあと先思い出が繋がらぬ

京都市 山本 礫

打てば響く梵鐘の疚いくつある
 チッポケな放浪をする 途中下車
 地下茶房の金魚もボクも生きている
 いつも不遜な人間に負けている
 お互いに醜聞があり 笑いあう
 せせらぎの音する切手貼りました
 ブーイングはしない 約束だったのに
 ふり向けばいたわり消えた街にいる
 息抜きをしない 黙っていてあげる
 もう波の音は忘れた 回遊魚

童話の国の話をしよう 紙オムツ
 冥界はすぐそこにあり 蛭とぶ
 人形の遠い視線に追いつけぬ
 どうすれば好きと嫌いがわかる手話
 母を叱る男がひとりいたらしい
 紅椿 ひとりの女より知らず
 風流に酔うのですよと言われている
 ポストに散る枯葉よ旅に出たいのか
 旅から出す絵葉書 妻へ様と書く
 やり過す ときめき十指より多し

屋上で待っても孫悟空は来ない
 京蕪のいくつか尻を叩かれて
 神々のシナリオ通り 歩きます
 古本屋は 私を匿ってくれる
 黄痘ではないのか壁のモナリザよ
 追伸に 毎日米を研ぐ男
 緑青のように錆びたし 美しく
 柚子姫と肌がふれあう冬至の湯
 契りと言う終止符がまだうてぬ
 忘却は 山を越えたか 海を越えたか

守山市 徳 永 政二

輪郭は鳥にだんだん近くなる
 よろよろと境界線を引いている
 やわらかい雨と流れてゆく黄色
 揺れている柳の下を通りぬけ
 金色の車に乗っている煙
 少し騒がしい落ちるときの音
 頭からタオルかぶっている金魚
 飛ぶことのできるやわらかい部分
 もう誰もいないのに木が揺れている
 水の音水は帰りがっている

酒こぼす通りがかりの者ですが
 滑らない箸で私の骨拾う
 鶴の口亀の口から出る涙
 走ろうとしても電車の中である
 人間と少し遊んで消える鶴
 結界の向こうも同じ木が匂う
 尾のところ少しまがっている金魚
 水のない川を眺めているひとり
 泣いているときも魚は水の中
 右の手を上げると秋の過ぎてゆく

水鳥の水に浮かんでいる時間
 手を合わすことを覚えてからの空
 君の全部僕の全部と橋の上
 一匹のヒュッと現われヒュッと消え
 君は今白いセーター枝にかけ
 水はこぼれて少しはすかしそうにする
 一枚の枯葉を巻いて虫の家
 青空に吊せば私の滴する
 おおかたの過ぎてしまっている男
 光らない石を静かに積んでいる

草の家

黒石市 岩崎 眞里子

泣いて走って夜いっぱいには花火の子
桃という大きな軟き子の重さ
葛葉子のまん中にある三輪車
大根とバラと夕陽と手縫いの子
皆去れり銀の齡の草の家
めめしきを雨といたせばいつ晴れる
業の礎 時にほうずき時に月
生干しの夕焼け本日これより佳境
ころの実ひとつ掩いで影壳屋
石段を傾け闇も母を待つ

蟬みどり葉裏禪師のうすころも
しあわせを問いつづけてる虫の声
錠剤の白さ紅さよ 花音符
たんぼぼもはこべも嘘を咲きはせず
地に伏して鼓動走らす花の遺書
海賊のひとひらなれば野に喘ぐ
散る如く流れる如く咲く如く
骨一片 人の記憶のさくらいろ
夕焼ける大地も人もこの先も
流されて戻れる岸に銀の母

少年の指めがねには白鳥座
神さまの楽しみ茄子にひかりの目
一對のこころ空いろ 吾亦紅
細胞のひとつひとつにいるあなた
白桃に朱を探してる朝の筆
ほのぐらき喉ゆえ朝の目を通る
にっこりと笑ったような骨のいろ
春一輪 地獄の底にこそ灯れ
わたくしのまん中空がつきぬける
ビックパンそして二人ははじまった

柳川市 梅崎 流青

そこから中雨人形を解体す
あさましき顔して吸る朝の粥
地軸揺れ蟬いっぴきを生み落とす
体臭の残る帽子を父から子
焚火の火消え覆面に囲まれる
少女らの鼓笛で撥ねられる魚
音楽のような少年汽車に乗る
大根の種とき深くなる眠り
とかげなど這わせてみたき少女の胸
寒月に研がれ一羽の鶴生まれる

昔を語る紙のさくらの汚らし
菜の花の明かりが誘うから困る
ひとりより寂しいふたり魚焼く
劇場の座席が一つ森にある
青竹をまず突き刺して海の祭
草に寝て五体をひとつずつ外す
水飲んでる間に無花果は太る
鮎を食う喉の辺りを漂う虚
薬灰の温さに騙されてはいぬか
水槽の中で魚くう魚生まれ

地中這う連根人の死を待てり
生きたまま食う海老ルワンダは遠い
夏を寒くして臓器待つ人ならば
とても怠惰な歴史重ねて蜩鳴く
爆死者がゴロリと夏の紐引けば
地底にはまだ男らの骨がある
壁の絵がしきりに何か問いかける
涙溜めているニワトリと擦れ違う
教科書のとおり生きて汚れた鶴
ペンキ塗る厚く悪事が洩れぬよう

岡山県 福力 明良

桃齧るまた軽薄にあこがれて
何かを呟いているふるさとの夕日
無位無官白はあくまで白である
忘却があるから以後が美しい
何よりも愚かに老父が映される
雪消えてあなたの歯型だけ残る
紅うすく引いておんなが勝ちに行く
戦いが終わった後の風の音
テーブルにポツンと僕の朝がある
善玉悪玉臓器はみんな美しい

氷点のあたり淋しい鬼がいる
ラストシーン男ひとりのバスが行く
樹を揺すりやがてひとりになるまつり
不都合なときに鳴るのは鳩時計
昏れかかる秋に写楽の絵と酒を
自転車で追いかけて行く蜃気楼
ライバルの死角で舌を整える
走馬燈いずれば白に辿りつく
月見草華やぐものをありがとう
一杯の水に正解らしきもの

枕少しずらして妻を考える
鍵穴を抜けたものを信じよう
盃がときどき寒いことを言う
大根の白の純粹さが好きだ
冷静になろうと鏡拭いている
ジュラシーがゆっくり動く秋の雲
今日も海へ青を探しに行くえのぐ
春爛漫洗い晒しのいのち干す
内助の功とても静かな雨である
生きざまを伝える舌が悪びれず

高松市 大谷 晋一郎

泥化粧落とす皆老人の祭り
祭り日に生れたる廃屋のありはあり
土掻きあげて老婦祭りへ向いている
紙切りの唄は地平に北へ北へ
指笛に飽き白昼の指狐
レンゲ島老婆がねむるのにつられ
菜の花へ沈む鬼子を沈ませる
千年の花びらが散る血の濃さに
青葉する弁当箱を枕にす
野の花にまだ童心の横顔よ

木から樹へシャボンを吹いている狐
草を焼く処で失ふ白狐
霧を生むことでみるみる太る杉
確かなるは老婆の踏まぬ草・木の芽
身を半分に笑ふ老婆の山つつじ
霧のなかに百の鶴折る羽搏く音
水底に現はる夏の都かな
婆ねむる座敷に昼のかたくり粉
芒忌の翁と話す七月夏日
呼び合えば鳥一列に被爆せり

わが呼吸の肺まで赤し山下る
鈴生りの実は赤々と森は墓場
空蟬の列が大樹の闇にある
秋の人よふれてはならぬこぼれ萩
流されてサルビアの朱は赤い故郷
誰が後先に芒を見んと泣き仏
霊山を下る童子は登るまるで素足
目を耳を草を起きると虚空仏
夢はいつも汽車に遅れた芒原
夕景は冬の扉を木橋まで

四日市 樋口 仁

手袋の奥に去年の雪がある
根回しをした夕焼けに気付かない
頬骨のあたりまできた春のうつ
うたた寝をしている真実の時間
歯ブラシで磨き続ける命綱
置きこたつ敗戦投手ばかりいる
妻の夜千切れた語尾を縫っている
コーヒークップから打ち上げた火花
防腐剤入りの言葉になりました
胃袋をやがてあふれる住所録

濁流のような湯船にいることも
ネクタイの下の地雷は見せられぬ
散る時も梅桃桜父の順
封筒の表へ過去がめつと出る
妻よそれは鏡の亀裂ではないよ
禁断の実が入ったと本屋から
格安の夕陽が父を慰めに
闇が降り込む鉦の取れたあたりから
レシートにつながつてくる核家族
外角低目いっぱいに来る父の秋

飲み明かす木々端微塵になった日は
ライバルが居るざらついた舌の上
乾く骨夜を一枚めくるたび
図書館で漂白剤を選っている
朝方のルーズな指を可愛がる
売り切れてしまった花を想う夜
天ぶらのつゆへ飛び込む時の父
瓦屋根の向こうの虹に投資する
ワープしてみようか陽だまりの駅へ
童を見に行く帰りの切符さえあれば

加古川市 坂東 乃理子

爺さまゆらり赤子もゆらり春の道
弟の墓も五月の風の中
キューピーは通せんぼする悪い奴
ピンポンの音する誰もいない部屋
冷やかな何か生まれる木陰かな
婆さまに担がれて樹のお引越し
ひざの穴じつと私を見続ける
小鳥の死イコール鳥形の空虚
隔離病棟へ小さな橋かかる
たまごっちの中のかなしい卵かな

どうしましょ帰るところのない子犬
鳥に似ているらし私の仕草
背中からあなたの鼓動聞いている
みんな帰って靴下片方が残る
くやしいね脱皮途中で死んだ蟬
砲丸を投げて婆さまたくましい
押入れは南 わたしの隠れ場所
ふにゃふにゃの人生 ふにゃふにゃの手相
指一本葉がわりにでもどうぞ
雄犬に抱きしめられて秋の中

公園の少女の話全部嘘
水色で空塗る 空は水の色
浴槽に柿を浮かせて父の秋
重そうに飛ぶ鳥あれば私かも
木の上に吊るされている志
慰霊碑にただ「慰霊碑」と書いてあり
鳥魚虫にも心ありて冬
私を拒んで悲鳴出すマイク
お雛様口から舌が出ています
湯の中に放つ私という金魚

西宮市 白藤 海

柿の蒂 生きているのはどんな運
ヒヤシンスこの世の色をもち始め
すんなりと春になったりしない春
力を入れず力も抜かず花ひらく
来るなら来い 春には春の水流れ
前日は握り返してくれた指
祈るよりほかなし冬の星冬の星
水仙の葉っぱ青青義父は逝く
かなしみさびしさまはやらねばならぬこと
喪主のとなりのとなりにてするお辞儀

霊柩車と霊柩車とがすれ違ふ
縁あってあなたの娘 ありがとう
人生の半ば過ぎたり春の川
口開けていれば終つてしまふ歯科
右の手でなぐさめている左の手
逆らうでも流されるでもなく薊
五月のいちようわが履歴書のごとくあり
わたくしを吸いこみそうな窓ガラス
ふり仰げばまさしく父と思える木
入院す台風がくる前日に

病院の窓から手だけ出してみる
去っていく電車ばかりがきこえる夜
いちよう直立生きる時間を共有す
秋日和食後の菓飲み忘れ
樺の葉ふめば樺の音がする
秋草の中にわたしの誕生日
林檎芳香後悔無縁現在地
いちよう散る散るわたしが深く念じると
諧謔がわかりはじめた柿の色
震災でみつけたものは私なり

北海道 渡辺 裕子

障子は白でゆれているのは半裸の母
葉さくらで即答をしたことがない
ささいなこと追いつめられる虫の影
激しい蛇行だったコーヒートをふたつ
坐りなおして遠のくものを聴いている
ひもを解き慣れたゆびから冬に入る
夕日まぶしく身内とはもういもの
泣いた日がひとつになって輪ゴム跡
形のないものが欲しくて目をつむる
もどり寒かい別れであるものか

戸を閉めてからゆっくりと光りだす
朝の水すこし流してから芽吹く
何に触れんともみじおろしをもういちど
オルガンがきこえる数行のはがき
襷の底のぞいてしまふ自己嫌悪
仮装行列の中で手まねく人がある
早口で言わねば落ち葉つもりだす
じぶんの手をつよくにぎっている真昼
うしろから壁に映ったゆうひが味方
吹雪のかげで思いつきものを言う

まだ足りぬ足りぬと象を追っている
落とした箸のさきに月光あつまつて
古い絆でタオルの乾きおそくなる
つららパリンと折って妻たらんとす
十二月包丁さしが濡れている
次のバスまで足をきれいに拭いておく
かくじつに歳を加えて三杯酢
薬味そろえてひとりぼっちを楽しむ
うす暗いものへかたむくコーヒーク
屋根ふかく洗いおわったものばかり

札幌市 高田 政旗

月を視るわが一点の範囲にて
男の激情ひとりの目を抱かん
否定から歩き始める葉包紙
モノクロの雨の真下のふくらはぎ
眼の時計耳の時計と漂えり
免れぬ構図心臓が置いてある
白い時間と生きる合掌の影法師
奥歯を歩いているもどかしい答え
肯定の隣りで犬が吠えている
磁石は旅人いつまでの未来

ひとつの穴があり妻の呼吸があり
春の念仏ちに問うははに問う
南無の日の右折左折を滑らかに
匿名のロードを歩むやまいだれ
「生きる」たった三文字の凍結路面
神経が飛び散っている冬の景
背中を呼んでいる肉声の街角
今すこしうつつの空を手ひらに
念と書き一途と書いて風車
風に貼る負の断面が夕焼ける

雨は横なぐり妻の寝息しんしん
モルヒネの海を漂う背のうろこ
いのちは生の血風の顔雨の顔
どこまでが此岸どこからが彼岸
向う岸で呼んでいるのはまぼろし
片時も呪文を側に置いている
咳こんで折りの中心点を描く
いのちまなまる一世ひとよの月欠ける
木枯らしの中にぼつんと低い屋根
死後の関係存命の縄梯子

姫路市 情野 千里

もちを搗く残る力でややこ産む
仕事場は空に近くて未入籍
この世からしばらく離れ煤だらけ
餃子カリッと何故かに乳を欲しがける児
閑話休題 好きな男に子が誕まれ
発禁処分の男がきざむ針生姜
待つときは北京オペラの眉になる
立膝のわたし墨絵のなかの黒
疲れ切った男を揺する死に切るまで
残酷な男よ黒豆甘納豆

足の爪 誰に操を立てて切る
悪い男に触れてわたしもおじき草
鱈をつつく鉛筆の芯とがらせる
友好国にあるアルミの匙の所有権
女に餅を焼かせて男悽愴たり
自治会費は深夜あつめる象の国
クリスマス・ツリー点滅 斧はどこにある
すこし酔っぱらっている金色のえのぐ
膝がコキリと鳴って心が離れていく
大中小の布をたたんで一家離散

紙の妻眉のあたりの薄墨桜
板に寝て肉の固さを確かめる
うたたねの妻に孔雀の羽根ひらく
桃園に狐跳ぶ夜が誕生日
長生きは出来ぬ男の眉匂う
嫉妬かな袋のなかの瘦せた月
キューピーのぼんざいの手が震えている
膝当てを付けて男は逃げの一手
美猫来て前に見たことしゃべり出す
主婦に戻って鰯の頭植えている

岡山県 辻村 みつ子

騒音も命と思う空を見る
寮の春夢描いても描いても
失明を裏切りやすき春の風
療養の中で覚えた笑顔なり
白牡丹刻は流れていくばかり
海を見る初めて海を見るように
ざわざわと波が女の胸で鳴る
大花火海を焦がして吾も焦がす
夕顔の白き炎に灼かれおり
父も母もはるかばるかよ茄子の花

さみしいから強気で秋と対い合う
風吹けば命を鳴らす芒の穂
穂がゆれて又悲しみを連れてくる
泣くものか木犀の香にむせぶだけ
悲しみも雨もやたらと耳に降る
椿まだ流れて来ない冬の川
冬椿そのしたたかな色が好き
雪ふるふる赤いセーター雪になる
最果てのような小島の風よ
いつの日も私の道にある段差

紅差しは麻痺の指なり血に染まる
現実の詩は無色の詩ばかり
胸底に咲くひとひらの厄介な
激痛を耐える季節よ沈丁花
ラジオ今吾が故里を喋りおり
傷だらけそれでも生きる深海魚
人形に話して聞かす今日の事
涙もろくなつて笑顔が絶やせない
捨てたくて棧橋に来て捨て切れず
夕焼けの後ろで待ってくださいすか

松原市 本多 洋子

不透明な愛 海藻は揺れ止まず
海月もつれ合つて鈍色迷路
遠雷におののく蝶はガラスの触覚
蟋蟀の脚もがれ波の浸触
薄氷に蛾の心音を閉じ込めて
蝶葬のその後もつづく孤雨
満潮にどっぷり浸かる蘭の花紋
やすらぎや蜻蛉朽ちる底なし沼
ガラス夕映え深海は蝶の散骨
シャンパンガラス水色音符あふれ溢れ

世紀末の空洞を出る毀れた楽器
ちぎれた風景を集める湿っぽい指
現住所を確かめる泳げない魚
魚も女人も五月の皿を飛び立てり
街は脱色 遙かな丘に埋れる耳
鉄塔交錯 夕日に溶ける男の腕
深海魚揺れ出す黄昏の街角
稲光り螺鈿の蝶を殺めしか
黄菊残菊きのうナイフを研ぎしこと
近未来に折り重なって火葬番号

水際に埋める傷だらけの本音
何の兆だろうしらしらと水音
沼が光っているから紙芝居はあした
鬼を宿した枯ひまわりを描いている
れもんスライス男は錯の匂いがする
道化面百の言葉をするする吐き
酒に花びら鬼となるまで神となるまで
両手広げて歓喜のかたち墮ちゆく蝶
青い崖ならガラスの馬にまたがって
薊が眠っているから山は聖地

象の背中

愛知県 渡辺 和尾

手足動かし 春の午後には象となる
鏡には不快な象の鼻が写り
菜の花が咲き乱れてる象の目前
桃・桜 開いて 象の親子の絵
絵本の片隅 水の匂いと象の匂い
池の回りに死に急ぐ象たち群れる
象の鼻にも二種類ありぬ日差しの中
森消えて象さえ消えて 以後乾期
リハビリ室でも象は両手を挙げてい
雨降れば溶けてしまうのです 象は

目を開けてこの世見ているときの象
死語の言葉象が使えば狂う夏
泥の中から現れるぞ 象の足跡
なにか狂っている 象の背が乾き
象 残暑 日暮れてからも 象 残暑
道は一筋 彼方を見ている象の腫
寒くなる 象の目いよいよ細くなる
村はおまつり 象には縁のない太鼓
象に 夢が言葉が未来があった
ポストまで千歩 象は繰り返す幾度

雨の時間を象の時計は刻み続け
ぞうのみのうえしらぬげにすどおりす
雪の舞う景色は知らず象は生きる
象にも夜 寒い記憶の一つや二つ
休日にも 象は起き上がり象に
草に寝て空を見上げる象の安らぎ
雨粒を身体で受けよ 象は抽象
風吹いて象行くところ吹き溜まる
夜が象の肩の辺りから 夢を取り崩す
風が吹いてくる 象の背も夕焼ける

土佐市 立原 みさと

桃の歯型残して君は疾走す
果実のように熟れるふくらみはき
空洞の子宮を泳ぐ熱帯魚
少年が日記に残す蒼い花
自分史のいびつな穴に酔っている
まふたつに割れない桃が食卓に
父・母と契れず子らは水を飲む
白菜の甘さが残る家庭不和
母と子の狭間で揺れるかすみ草
卵巣で無言劇を繰り返す

逆縁の子が降らす花の雨
菜の花がポキンと折れる核家族
振り払うもの多すぎて野火の中
共鳴す絵の具の中の父と母
橋渡る母が絵の具を隠し持つ
うたかたを重ね織りする母の指
運命は亡母の川と蛇行する
掘り起こす凍土に父の玉手箱
狼の眼に父の墓がある
菜の花は善男善女生み分ける

花びらに女と記し逢いにゆく
縋る手をほどけば闇が匂い咲く
裳裾から春の花が咲きはじめ
能面をはすせば爪に情 念が灯る
むらさきの涙を溜めるふくらみはき
またひとつ唄を忘れる母の闇
秋の岸 言葉少なに手をつなぐ
人の子も鴉も西へと解脱する
処方箋花のインクで書いてある
骨董は一つ別姓のまま眠る

和光市 高 鶴 礼子

確約が欲しくてのぞき込む余白
過去形の始まり 君は笑わない
あいづち打ちすぎてひまわりが枯れる
陽は頭上 心蒸発せよ愛も
シャツ脱げばまるで誰かを待つかたち
気づいてはいけない 愛が針になる
ちょっとだけ泣こうじゃがいも煮えるまで
好き いえ 万緑に歯をくいしぼる
満開の花 生きていいですか
春キャベツトントン扉開かれる

小雨決行 仇も傘をさして来る
施しや脚を伸ばして鳥は死ぬ
全身の毛を逆立てて桃孕む
蒼だ蒼だ蒼だ かくれる場所がない
とことん無様 とことん無力 蕊飛ばす
残酷な「いえ」を言って乾く喉
穿たれた方は覚えている楔
さといものぬるぬる 情は情として
バカなんて言われて月見草咲く
花植えてここから鬼の住処なり

子をふたり産んではるかなゴビ砂漠
二重底のコップゆらゆら決められぬ
穀象死んだ 誰も知らない語らない
言葉尽くして迷宮のでき上がり
一人称単数現在にて歩く
この線を越えたらかすみ草が死ぬ
こらえきれない 全身の穴全開に
抱きしめても抱きしめても救えない
向日葵をかつと睨んで死んでいく
わたしの中に太平洋がある うねる

仙台市 鎌 田 京子

引き出しを開ける 止めどない流砂
女から生まれたものに昼の月
食卓に盛るわたしの大部分
さくら見にゆく父を縛って母を縛って
壁ばかり見ている鳥籠の中で
どうしても足りないジグソーパズルのかけら
全力で放置自転車走り出す
窓ガラスひとつ割ってはみたけれど
月の砂漠を通り抜けてきたピラス
くず籠に溜まるちぎれた手と足と

頷いた首から向日葵が枯れる
線香花火ポトリと落ちるわたしの眼
熱い言葉で紙風船をふくらます
ゆっくりと夢腐りゆく冷蔵庫
しょう油差しに注ぎ足す残り時間
死んだふりする人間と会ったとき
横縞のパジャマで家に繋がる
燃えないゴミに出す指切りげんまん
まだ夢を見ているわたしの傷口
傘買ってそれから雨が降り止まぬ

コスモスの首と通じてしまう鍵
チリ紙交換 汚れた魂と
口元の明るいうちに家に着く
オムレツに包む夫と子ども三人
砂まみれの飴玉ひとつ渡される
飯の世をするりと抜けるすべり台
ぬいぐるみ脱いだら日曜日になった
臘月やがては母になる綿毛
遮断機が上がりふくら焼けたパン
家中の刃物を研いでいる日暮れ

苦小牧市 伊藤紀子

はたはたと女がやせる雪の村
身の内の水たちあがる猛吹雪
風花や地球の裏のカーニバル
細雪胎内時計垂直に
産土の雪の昏さを灯しおり
如月晴天家族合わせの地平線
三寒や匂い袋のひそかな乱
四温陽だまり柑橘系の文庫本
菓売り紙風船は雪の匂い
芽出し芋母の抽出しびしりと

梅園は多情 出口が見つからぬ
鬼追うて桜をおうてゆるい歳月
ゲリラが仆れている辛夷が咲いている
春の鹿包丁研ぎを待ちつづけ
水番の灯が漏れている酸っぱい夢
霧笛の音階紙の兵士を湿らせて
パン皿の朝をはみだすナスカの鳥
マーマレード落す風の水平線
梅漬けて霧が動いていく思想
雌花雄花さみしきものが響き合う

竿竹売りが通る 猫の時間
ポケット電話 無臭の海を漂うて
コンビニの灯よたらちねは遠く在り
絶筆の馬を奔らせ十勝晴れ
土器片を洗う世紀末の筆
猫の目の高さに溜る人の塵
人の世の隙間へ延びるつかずら
ふりむくと薊野がある母の歳月
一つ身の金魚ひらひら婆もひらひら
梅壺を満たして二十一世紀まで

青森県 戎 踊兵

空みんな背負ったような四月の子
藤棚にふじいろ爪の中に泥
たつぷりと血を吸いそうなかすみ草
水槽の金魚ばくばく父危篤
太陽の笑顔にふさぎ込む鴉
試みに空を吸っても泥の魚
流れない川面病院の日溜まり
黄痘の目にきっちりときる意志
父が逝く回り舞台に立たされる
麦わら帽亡父が残っていた薔

歳暮れる避雷針から踵まで
撫で肩で亡父の滑り台を降りる
腐臭する死体も同じ場所を病む
冷夏予報の網戸を逃げてゆく腐臭
汗が嫌いな位牌堂の冷房
鐘撞き堂余韻はどこへ向かう道
辞世の句書かせ最後の照れ笑い
癌九年 六十四と七ヶ月
枯れ葦を千本描いて父の葬
モザイクの歩幅で喪主の位置につく

髭伸びる虚空へ開く自動ドア
忌の点をつなぐと僕の新世紀
錆びてまだ芯の残っている鎖
鬼を逃がす鉋が髪を切る音で
錆びてゆく亡父の剃刀父の拳骨
父逝って子を得て同じ雪の粒
はしゃぐ子は別れを覚えていないだろう
ヤーレンソーラン父の墓を建てる
百ヶ日亡父は再び発芽する
パスボール父の想いを追いかける

名古屋 吉田 三千子

暁は泣き出しそうな薔薇になる
ふかぶかと雪に包まれゆく窓辺
どの人も闇の手配にかかるなり
いちまいの闇を鉢に捲いてゆく
心音のほかなにもなし六畳の居
秋の陽にぼくの金属そと飾る
お伽噺の宮に集めたくちびる讀
群落のわが夢・雪は野を埋める
湿った風と額の熱と僕らの林檎
怠惰な宴 その足の指広げよう

これがぼくが一番好きな絵画集
生きてゆく裏を流れる川がある
卯の花が咲く町を行く傘さして
死ねなかった私はいちにち空を
身体沈めて右に左に真っ赤な秋
黒を着る 黒を脱ぐ 葡萄の庇
囲みきれなかった人をおもう冬
こなゆきの道を歩けばわが条理
風唸る 裂かれ開かれゆく絵本
行方知れずになるための天の橋

なにならうと問う 夕暮れの楡
碧集めて光り出す春は虚構の中
朝の木を見ている誰からも遠く
蒼然と立つ真昼の一匹か一本か
静かな花に静かな月が重なりぬ
夕暮れの靴をブランコにのせて
柿甘しわたしの傷をつつく百舌
コーヒを二杯も飲めば親密に
影法師歯を磨いたら出かけよう
眉を描く私の方がちょっと不幸

市川市 普川 素床

飽きの来ぬ背中を眺め日が暮れる
嘔吐の練習恋の練習時計はいつも
ユーモアを乾かしている戦さの後
ジグソーの隙間に定年をはさむ
自分史に残す原寸大の空気
刑期を待つ眠いトンネルが四、五本
木の股の先に木の股微笑する
虫の顔富二が長い咳をする
晩年の知性に毛など描き足して
砂絵の絵解きの手足から砂に

いい雰囲気で形容詞黙っている
性犯罪のようにぬいぐるみの温み
自句自解水の都は水が好き
きつねの出を待つあいまいなフライパン
灰いろが動き灰いろほっとする
結跏趺座窓ひとつ描きふたつ描き
遠くを見るように風呂敷をひらく
楕円形の眠い意識のまま陶器
すこし危ない透明感へ声を出す
水母が過ぎるうとうとと休日

抜き足を差し足が越す長い日々
薄暮に描き足す吃りがちな窓
王道はなし大根を厚く切る
逃げた空 するめを焼いているうちに
さりげない幸せさりげなく腐る
月の暗がり神輿のような便器のような
舌のかなしみをオブラートで包む
後ろへ後ろへ 与太郎の新しさ
うまし風流 時間の秘所を洗いつつ
ひとり芝居の影ひとりでにたまれる

豊中市 姫乃彩愛

立ちくらむ音なき都会という異国
 けもの語を発するドミノ倒れだす
 まぶた閉じるひそやかなる精鋭
 白い絵の具を下さいこの街をぬりたくて
 わたくしが円周孤を抱き孤を愛す
 一本線を書くゆつくりとぶらさがる
 深海にアトリエがある本めくる
 器からあふれる雨傘を下さい
 優しい弦切れそうです息とめる
 持ってる絵の具は一色生きべたな

憎むものなき責めるものなき毬転がる
 癌告知終わらなきは協奏曲か
 十指より光放ちて陽炎の病父
 病父より一人ぼっちのプラットホーム
 シナリオにない真白きバスの席一つ
 おえつ殺す木があり訪ねゆく枯野
 病父の抜け毛拾うわたしの風車
 病父に会いに行く笑えないブランコ
 病と向き合う砂の階段石の階段
 恩身に父流れ母流れ舞う

夫よ夫くの字に眠る天の川
 もどれない遠いメロディー回るまわる
 枕二つ並ぶさやかな進行形
 りんご剥く一期一会の始まりに
 桜満開 コイン裏返す
 終わらなき折り白線はまっすぐに
 真実は流れ続ける赤い糸
 ひざまづく浅き眠りも深き眠りも
 冬が転がるこんなに息が白きかな
 秋桜はすべて許して散りゆくか

八戸市 横澤 あや子

秋です未決事項の貝拾う
 何欲すキャベツの外葉うら返る
 冬の雨引き寄せている電話帳
 花かつおの踊りわたしの出来心
 ふと不信ちひろの本を見るあな
 文鳥が逃げる男の色をして
 生まれ落ちた熟知る髪の毛のもつれ
 夫という骨になるまで明日まで
 愛終わり窓は四角に戻される
 囁んだのは愛だったのか生栗か

逝く人は逝った わたしの肌の照り
 日が昏れて魚になる日の薄化粧
 瓶に友挿して真昼の揺れやすし
 失ったものあり鈴を響かせて
 頰杖の紙いちまいのわが広野
 火種にはなるものでなしピアニシモ
 青紫蘇にくるんでハイという言葉
 何の傷秋のうしろの鏡拭く
 蘇生した椿の藍を見ましたか
 地べたにて蝶は裂きたし抱かれたし

金銀のクレヨン今日も暮れやすし
 鏡掛け上げれば奥の針葉樹
 玩具箱の先へ先へと舟一艘
 半丁の豆腐と走る夕日まで
 傷口を観音びらきすれば蝶
 小ひき出しに正座したまま母が逝く
 くちびるが今閉じられて月の中
 経机の向こうに母の帯流れ
 別れては葡萄の肌の真紫
 スカートが開いて着地 この世とは

大宮市 佐藤 美文

にらめっこ眉の形から崩れ
 負け戦ゴルフボールの大きさほどの
 花束に隠す悪意がよく見える
 甘え上手にパンが焼けました
 理想論きれいな花は折れやすい
 エスカレーターに官僚の指紋ばかり
 賢くなった蛇の尾は踏みやすい
 欲深い花をきれいに包ませる
 ごみ処理場へ渋滞の蟻の列
 信号を待つ何時までも若い気で

ムンクの絵いいえ幼稚な独り言
 メビウスの環に逃亡者がひとり
 プラス一に異論のない午後よ
 森深く迷い子の石は一つだけ
 言い訳を幾つも作る迷い著
 やはり万年筆がいいあなたの住所
 種明した正月の空のいろ
 遊び上手のてにをはが軽い
 雪白く屋根も言葉も丸くなる
 雪道を駅まで歩く長い話と

四月馬鹿正直者は桜だけ
 慰めてくれる晴れたり曇ったり
 待っているだけでは靴は揃わない
 生きさまもバンドの穴も変わらない
 帯の長さへ反論が迷い込む
 手を洗う仕種の中にある輪廻
 不機嫌なままで秋刀魚が焼き上がる
 秋の空話相手がそこにいる
 片道切符なら私も持っている
 卵より先に腐っていた素顔

堺 市 柴 原 道 夫

中年や胸びれが痒くてならぬ
 よれよれになって純喫茶に入り
 只今の地球を思う目玉焼き
 コーヒーのこと考えてコーヒー飲む
 天上は乾ききったりかたつむり
 空き缶を逆さに何も考えず
 折れ枝持つ人が石段降りてくる
 噴水のそばの声なき遊びかな
 似て非なる遠泳の道蟻の道
 カヌー漕ぐ光まみれのしづき浴び

水中の腹を子どもが突きにくる
 プール帰りの家族 プールに行く家族
 浴後呆けて居しが娘に虚を衝かれ
 ビー玉を口に含んで知らんぶり
 チンパンジー頭かかえて悪びれず
 落ち口の水に見とれる旅半ば
 蛍飛ぶ 点線は美しき
 恋人に被せてみたい浅黄幕
 劇場を出て足元がおぼつかない
 酢の物を頼んでほっとする男

欠伸して人生少し軽くなり
 たたまれた昆布をひらく肉欲か
 オムレツを食べてふわふわしてきたり
 女笑いつづけいつしか鳥の声
 じゃらじゃらと鳴らせば袋いやらしき
 茶筆筥の菓子成形と思いきり
 鳥籠の中のわが掌の大きさよ
 机の上のクルミ静かに燃やさんか
 電線をいまだ甘しと思うなり
 屋上に人居て人無きがごとし

高松市 みとせりつ子

椿剪る胸を流れる黒い川
 椿背負い隧道暗きふるさととは
 亡国の兆し無心に藍染めの桜
 汝愛す山魚の静かな遊泳時間
 戻観音姉を戻して柔らむ慈眼
 花舟を押す累累と母の業
 横向きの神いて母をないがしろ
 水仙匂う母は正しく枯れてゆく
 わたしの運命か森の木椅子を持ち歩く
 「死」に吹かれ体内分裂始まりぬ

月の道 逸れそうなる娘を産みに
 この子かげろう母もかげろう水部落
 上り框に声して夕影過ぎゆけり
 俯して秋虫のごと這つてもみる
 秋の陽さしを潜ると故郷 柿の坂
 柿盗つて母の時間が光ってくる
 やがて野分が芋づるを積む農夫
 豆の木を登るうたた寝の月に
 デイオニソスは死月夜の誰も眠る
 雲流る檻樓まとうて野良仏

洛西の芒に描くわが罪業
 芒家族の吹き寄せられていた生家
 芒木枯し目閉すれば冥府かな
 惰眠むさばるこの蒼天の芒原
 覆水盆に返らず冬の放浪者
 凍る地とちよ黙すか生家消ゆ
 静座していのちゆきつくところまで
 一切は雪の浄土に耀けり
 月病めり弥陀の芒を地に降らし
 神とまみえる遠山の芒女たち

網走市 岩間トキ

シナリオを等身大に書き替える
 クロスワードの一字抱いて朝になる
 雪のてのひらから私の汽車が発つ
 流水へ番屋で手紙書いてる
 水匂う春のきざし登らんと
 子を生んで川の深さを知りました
 子の柩の真ん中に置く哺乳瓶
 もう一度ふりむく母の白桃に
 形状記憶やっぱり母へかえりつく
 流水の女と言われてから哭かぬ

さくら咲く頭上このはななくやひめ
 錯覚は月光を素足で踏んでから
 罪状認知 一根の薔薇ひらく
 手鏡の中でころんではかりいる
 人間に戻る時間を神が呉れ
 炎天や蟻の柩は蟻が曳く
 八月のパレードいくさ曳きずって
 玉音がまだ残っている耳がある
 モノクロの蟹工船に鳴る霧笛
 放置自転車の中で乾いた音を聴く

少年へ波ハードルのかたちして
 器からこぼれる水の味方する
 じゃがいもの花が叱ってくれた道
 死刑囚の散骨故郷の海が抱く
 人間という名の始発駅がある
 梅ボートン天のしずくかもしれぬ
 完全燃焼へさんご草のあか
 人間の腐敗見ている猫がいる
 三枚におろしてみれば罪と罰
 傘立てに見知らぬ傘が置いてある

青森市 斎藤茂生

千蝶噂は芯までしみてるか
 さんま一匹あっけらかんと卑怯者
 懐かしの名盤を聴く河馬の口
 駅に行く道に残ったかぞえうた
 ほんとうの月はこの掌に握ってる
 抱擁がギシと音して繭となる
 原始月光 土偶しずかに割られゆく
 割れそうで指で満月弾く夜
 寒鰯が太い言葉で語りだす
 あらわなる僕の尻尾に通る雨

ポケットのネジが消えて何を喪う
 あったかい目玉を包む冷えた掌だ
 子にかざす掌から粉雪降っている
 何をみて開く瞳孔ダリの絵よ
 一房で致死量になる掌のぶどう
 スタートを待つ両耳が尖りだす
 割れた空ビー玉蒼く掌にのこる
 僕の名を騙る大きな影法師
 やわらかな沈黙バラは束になり
 信じると書いて丸めた紙の屑

首ひとつ置かれたままの腹話術
 春雷や血族という濡れたもの
 僕は部屋 空のかたちに空をもつ
 わが胸の海に向かったタゲボート
 白湯をのむ胸から蝶を吐いた夜
 児を彫ったノミがしずかな音になる
 落ちりんご母と逢おうとして落ちる
 つり針に添ってねじれる過去が餌
 水に抱かれてヒトは受胎をくりかえす
 言い負けた語尾に駱駝の鈴がある

東京都 島田小吉

振袖が笑う二十歳の車椅子
 古書店にいつも気になる和綴じ本
 蔵書印押して書棚に眠らせる
 窓際で角を無くした鬼眠る
 塾の無い日だけ子供の顔になり
 人文字が戦の色になる怖さ
 戦争を貫く論理目には目を
 慰安婦は彼我の落差に立ちすくむ
 満開の桜杉村春子逝く
 来世紀まで生きたいと書く日記

哲学書読み捨てて出る夜の散歩
 果たせても果たせなくても夢一つ
 人の世の輪廻悲しい数え歌
 友情の川に流れぬ借用書
 自分史の青春編に残る染み
 度忘れで事が済ませる年の功
 遊歩道自分のリズム取り戻す
 父の風母の風吹く蛍狩り
 年金の暮らし細々遊歩道
 盆踊り耳を澄ませば反戦歌

命断つほどの川柳鶴彬
 原爆忌釈迦とイエスがすれ違う
 食い違う美意識を知る絵画展
 人生の旅路で遭った人と酌む
 無分別だった若さをいとおしむ
 会社への道しか知らぬ靴残る
 バスツアー隣り合わせの運不運
 中年の前にパソコン仁王立ち
 宇宙でも銀河同士が喧嘩する
 百年を生きて無欲の涼しい瞳

新潟市 渋谷 美和子

元旦も葱を刻んでああ女
薄墨の余白に乱舞するサクラ
正答をこきみに出すスベアキー
絵馬堂に吊すワタシの飢えた首
言い負けたズボンの重い折り返し
沈黙黙考赦すことばが瘦せてくる
ブラス思考へ茄子も胡瓜も艶を増す
聖戦を信じた父と眠る海
分別臭いカオして猿も野天風呂
税込みのくしゃみ鼻水アハハのハ

人參ジャガ芋父の言葉も煮えてくる
幽玄の闇へ消えゆく白い足袋
竹光で斬りたい程の憎しみを
言い訳の筆跡巧みすぎないか
値引きする意志など持たぬバーコード
八月十五日黙って空をみています
正論もうす紙ほどの乱を抱く
レクイエム花・はな・ハナの花の海
無蓋車に父の鱗が忘れられ
屈辱の疵解凍はできぬまま

錯覚の靴履き秋の雨の中
殺意などないのに花の首落ちる
巡る忌よ母の名薄い鯨尺
少年の答えが浮いている川面
旧姓に返る日海も凜いでいた
無菌室いのちの重さ考える
計の予感さん花ぼとり散りぬるを
クローン人間の巣立ちあるかも来世紀
すこしずつ亡母に近づくと五日寿司
除夜の鐘煩悩解脱せぬままに

札幌市 佐藤 幸子

身はひとつやわらかな石投げ合って
笑えぬ身笑い袋をかき抱く
棒鱈いっぽんどちらへ転ぶ知恵くらべ
さり気なく繕う淡き手足なり
守備範囲少しひろげる春のうず潮
鯨舌もやっぱり淋しがり屋だった
侮れぬ藁いっぽんの理想論
ジャンケンのぐーより出せぬ身の翳り
残り時間を確かめたくて踏むペダル
いくばくの余白へ爪は伸びてゆく

蝉しぐれ蝉はとうから人嫌い
打砕かれて梔子の実の証
静けさの中で発酵するポエム
守り抜くほのかに揺れている芒
握り拳の中をときどき陽にさらす
復刻本よ少し黙っていて欲しい
蟠りほらこんなにも根は元氣
指鉄砲誰にも当らぬように打つ
妥協点ぐらい知っている練りがらし
冬母逢いたいときの逢う手立て

晩秋のパン屋のパンのリアリテイ
片類は夜叉に差出すおぼろ月
どっと来てどっと帰ったみな他人
満艦飾の荷をひきずって埒もなし
泣き囁る万愚節まで解まで
薬は歌う身の丈笠の丈
良き友がいて半身は空け者
雨だれのぼつりぼつりと天声人語
寒の月あおぐ 連帯保証人
合掌の形に今日を折りたたむ

花巻市 あべ 和香

骨密度まだしばらくは歩けそう
進めば道あえかな彩のひとすじに
跳ぶ向きを変えてみようか鳳仙花
ゆきゆきて蒼天遠き手無し瓜
影もなき身の置きどころ舐い舟
咳ひとつ鎖骨に溜まるもの払う
花もない病いの底も今日あたり
積木くずし かくて秋刀魚を二匹焼く
悲しみにも効用ありて満ちる月
葉さくらと同じ寂しさ抱いている

揺れながら大人になったんだね きみ
冬期限定のころとチョコを売りに出す
七重八重なにを怖れて身を守る
放物線描けばきみの佇つところ
船酔いに似たる眩暈や花ふぶき
煩惱を刻む音かも千六本
茄子の花言わぬ言葉が届く耳
布団を叩くころを叩く十字架で
落とし文開けば子の声風の声
美しい尻尾だ騙されてみよう

鯉一本さあわたくしが試される
三日月を太らせるまで飼っている
伸ばす手払う手春のノンフィクション
叩かれて叩かれて草書体になる
まん中で鎖を切ってさようなら
歪でも円を描こうとする両手
いまが旬あなたの皿に乗ってみる
きみの掌のくぼみの波に溺れそう
心まで辛くはないぞ唐辛子
白糯米 覚悟はすでにできている

松江市 竹内 すみこ

たわむれに薔薇頂いてから狂う
馴れ初めは聞かずトマトはトマト色
遠花火美しかったのは闇か
投げやりの言葉が戻るファクシミリ
綿菓子握りつぶしている男
番組を降りるといつか忘れられ
笑い袋の三つや四つ持っている
捕虫網いつか人間捕るつもり
嘘入れる箱にきれいな紙を貼る
笑い乍らお互いの傷深くする

夢追うときいつも幼い顔になる
どこへ行こうか誰に逢おうか今日は晴れ
面白いうちに転んではかりい
得手勝手ばかりする人好きになる
間違ったまんま流れている川よ
小姑さま佛になれば佛なり
火葬場の待合室で飲むコーヒー
再びは泣かぬつもり落ち椿
山照らす月になりたし山を見る
悪あがきして私を見て貰う

ゆつくりと石段あがる梅雨晴れ間
寺巡り終えて山かけそばうまし
足の指昨日と同じところ打つ
自惚れたいちごに長い雨が降る
手火花が消えればもとの闇になる
私のがぼった木から降りられず
傷をもつ犬も愛しいもののうち
手に余る紫陽花切っている独り
椎若葉に隠れて君と暮らしたし
鈴の音かすかすかにひびく鍵

伊勢市 東川 和子

はじまりはいつもどきんどきんする
十九歳のくちびるのような春です
億光年の偶然で菜の花見ている
四十八歳の春 もっともって握手しよう
少年の大きな耳よ 春はジャズ
このくらの幸せでいい 花の下
かすかに違うんだね ひともみどりも
虹が出た 次のバスに乗るつもり
そのむかし花嫁だった 六月よ
全ページに雨 会いたい人がひとり

洗濯機が元氣 私も元氣である
よく笑う指だからよく洗っておこう
夏に飛び乗った友からの絵はがき
残暑お見舞い 向日葵はまだ歌ってる
川の音 亡き人の声ばかりになる
くよくよしているとそうめんのびちゃうよ
人が逝きこんなにわいてくる力
雲が変わるように人もまた
台風接近 息子が一日家にいる
満月や夫をこちらに向かせよう

コスモスゆらゆら叱ってくれる母がいる
秋空を突き刺す位置のクレイン車
少年になる午後BGMはエデンの東
絵本の森からあわてて帰ってきたの
すべて秋 これから眼鏡買いにゆく
結局波に漂ったままである
哀しいなどと言うから雪が降る
マフラーを外そう冬の美術館
私をどんどん広げると 青に
幸せをキャッチするこの両の手で

札幌市 高橋 蘭

春宵の酔もあぶな絵も匂い立つ
臨月にあわせて決める髪の方
模様があえ夫婦の位置を入れかえる
目無し達磨の目を植えざるは卑怯者
労咳の墓にも青空は広がる
裸の水と戯れ平成万葉
すこうんと月むかし白首屋のあたり
鼻に夜泣きをあわすリターン・キッズ
冷や飯食い三年先のあつけらかん
雨音の異なる上の屋根下の屋根

木の瘤に化身するのは父だろう
覆水の盆をなれば劣性遺伝
ホームレスのパンを欲しがる逆噴射
病人がいます鉄格子を植える
寝袋のなかに抱き込む不燃物
症候群ドアの取手の不自信
有精卵こわれやすきは人の核
独居房そっくり棺桶になった
エイリアンになった失恋以後の虹
鍋釜の寂れと胃袋の荒野

空缶をつぶす指紋は粘着質
人型の沈む椅子とも腐れ縁
体脂肪ふんだんにつく背後霊
落葉掃く日はひたすらの落葉掃き
結果を張る裸のありどころ
月は欠け始めた葬儀屋の笑窪
素っ首を洗う花野の道すがら
夕焼けを貪る手掴みの食欲
わらしべの一本を抱き郷に入る
椀種の括りにいたす父の骨

名古屋 加藤 正治

憶病で毎日毒を飲んでいる
裏返しスポンを履いて踊ろうか
胃袋の中で光っている落葉
トイレトペーパー二十一世紀まで続く
市民権蟻が広場で死んでいる
記憶には低温火傷書いてない
掃除機の中から夜汽車逃げていく
エンピツは無党派ですと走りだす
大安に私は家出しましたよ
飛んでいく煙気になる視聴率

吃水線男を殺す策がある
決断は完璧だったとかげの尾
眼球疲労いつも守衛が立っている
春です黄色の花に触れないか
残り火に修正液をかけてみる
戒名をつけても金魚まだ死なぬ
向う側座っただけで拜まれる
何を跨いだ血の多い子が生れ
毎日香男を看取る宿になる
生き方を変えても死んでいくんだね

石ころが芽を出す頃に会うという
包装紙の生首も新鮮だ
月影に凭れて秋の人になる
ママカリが首垂れている塩辛い
月光は甘くなったら気をつける
風景画大きな切手美学だな
銀杏を焼くか茹でよか迷い坂
手のうちは誰にも見せぬ現在地
火の色にわたしを染めた火吹竹
蛭という名の女あり明くて

和歌山市 野々 圭子

チャルメラを曳いて花野は寂しかり
ふくろうが雪の手袋編んでいる
哀しみを焚きつづけるかわたしの木
雪降れよどこまでつづく銀の匙
いのち燃え百と一つの火を灯す
一音高くわたしを呼んだ石の笛
夏過ぎるひぐらし遠く七つの神話
石抱いて花抱いて 風の狂
もう汽車はこなかった 花が散る
動かない花とわたしの遍路道

夢のなかで 花はわらっていた
空焼けていのちの流転拡がりぬ
哀しみの極みは夾竹桃の 赤
鳥の目は海をみていた終の栖
海の色をまっ黒にした夏の月
太鼓打つ沈め夕日死者生者
満月へ土偶の傍り鳴りやまず
風は教えたお前の森は焼けている
終止符に続くあなたのマラー「復活」
焼け野原ひとつの石とあけぼのへ

離流し青い外套の夢託す
渡りたい橋がいっぱいこころの海峡
雨戸開け虹のひとつを掴みけり
樹々の曲歌わんか顔のない像
何色の雨にうたれて蓮華野に
痛みもつ風の行方にくらり在り
ふくろうの夢のなごりを視た桜
泣かないよ野の花ひとつまたひとつ
花びらを沈め安吾の夢がゆく
一つを灯し二つを灯し 桜散る

福岡県 長井 すみ子

襖絵のさくら母系の血を継いで
 さえざえと月芽々と木の葉苗
 古本屋駄菓子屋父のねむる町
 虹の真下交替劇が始まるぞ
 故郷は博多わたしも人形も
 母を訪うたら坂の秋つばき
 わたくしを探すトンネル掘っている
 春の絵に毒消し売りの鈴が鳴る
 いつまでの一人綾取り花の雨
 葉包紙神の使いの鶴になれ

ここは何処芒三百六十度
 河口まで水のことばに逆らわず
 泪いろの蝶がうまれるわたしの野
 秋の奥へと傾く想い出も影も
 バラの棘ひまわりの詩風は秋
 正座して聴く海鳴りのいま昔
 太陽と誓う野良着が干してある
 縄のれん分け平成の山頭火
 解く帯のながさ一夜のけものみち
 逃亡はいつまでタヌキそばの味

陽は真上おんなが家を捨てる刻
 だらえもんのドアから二十一世紀
 春は沖から招待状は隣から
 還暦の積木くずしはほどほどに
 珈琲はホットでさよならはクールに
 すずき野もれんげ野もある母の部屋
 笑い絵馬泣き絵馬春のオムニバス
 紅落とす鏡の中のおとこ運
 まぼろしの馬車来て姉を連れてった
 母という長いトンネルまだ続く

和歌山市 福井 桂香

確執へ雪が積もってゆく時間
 夕暮れは埴輪の口になだれ込む
 カタカナがびちびち並ぶ花屋の店先
 ワンカップ揚げ逢いにゆく夕桜
 猫孕む切り取り線の向う側
 てのひらに溺れる猫を飼いつづけ
 ハーレムを覗くと鯉たちの滑めり
 句読点にてんとう虫を遊ばせる
 火曜日は絵本の森を彷徨うて
 カラスが帰ってきて多弁になった森

海底のトランペットが叫び出す
 暗証番号を捜すおもちゃの箱の中
 ああ忙しい引出しの三段目
 日変わり定食やわい男を飼慣らす
 机に噛りつきまるい林檎を裏返す
 安楽椅子のあっちこっちが綻びる
 踏まれたら悲鳴を上げよ新聞紙
 惜別の鱗一まい貼るてがみ
 ジェット機に乗る大きい手ちいさい手
 砂時計とおい駱駝の背にゆられ

塔の形で朽ちる読みかけの本
 エッチングの森で溜息ついている
 ハローワークへくる千手観音さま
 クローン羊バベルの塔をよじ登る
 縄文の穴に座ってみる野心
 街に住み如蓮華在水などおもふ
 蒟蒻畑にすらりと百済観音
 生は歎び死もまた歓喜顔上げよ
 魂をゆすると銀の星が降る
 わだかまり捨て蒼穹に誓うもの

花散りぬ

水戸市 岡見 阿衣

全粥に今日もひと日を支えられ
 邪魔物があって覗けぬ腹の中
 黄味おびた肌は見ぬふり爪を切る
 血液の染みたよなオベライト 待つ
 婦長の指に手品をかけたいい笑顔
 見えぬ目で「百合が匂うね」白い壁
 「乾してくるまで待っててね」 渡すベル
 室温二十五度 湯タンポ入れてナース待つ
 生きる為の医療器またつけられ無言
 追いつめられ追いつめられて しがみつく

手の甲に点滴 うどんすすった彼
 全粥がなかなかさめぬ箸の位置
 萎えた手でまさぐるイエス見つからぬ
 作句帳見ればあなたの風が舞う
 作句の字荒れてきました顔を見る
 少しずつ此岸はなれたベレー帽
 今までの思い出病窓に貼って見る
 花街道歩幅合わせた頃思う
 分け合える痛みなら吹こう月の笛
 カスミ草一つひとつに住む如来

君が為白旗あげぬ果てるまで
 別れの門いよいよくぐる心電図
 くるくると生きて結局花散りぬ
 秋しぐれ一人芝居の風となり
 足跡を白い雨脚消してゆく
 複雑なうねりの中で耐えました
 寄り添って結び直しがしたかった
 寂しさと向き合い一人茶渋拭く
 忘却はきつとないだるベレー帽
 別れとはしと雨いろ 風も哭く

北海道 桐越 千繪

一族をつつむ風呂敷繕うて
 雪撥ねて四十四キロ発光す
 冬鏡 現在生かされる紅淡し
 年金の財布一羽の鳩を生む
 雪は朝から眼の前を行く献血車
 いま着いた吹雪く葉書を読んでいる
 鶴の子に甘酒進上 雪和む
 神からの時計を抱いて冬越えた
 シクラメン別れを惜しむ子のように
 路の藁この町愛す白い靴

薄い耳春のピアノに癒される
 唇は峠のあたり雪模様
 坂道に混声合唱さくら散る
 うすい肋よカラスの街を歩いてゆく
 電柱の隣人愛に諭される
 七月四日姿勢正しい犬に逢う
 葉さくらのその一枚の弾む声
 夏みかんも文芸欄もビタミン補給
 朝顔の願いポストが熱くなる
 いくばくの花代添える葉月の梢

残暑の宙 その名も知らぬ鳥疾る
 雑音の抱擁解かれ耳動く
 人文字の流されて行く岸に佇つ
 ネックレス首から落ちて風の輪に
 秋明菊に呼び止められて恙なし
 一年は瞬きの間よ籌つばやく
 冬ばらに健やかな骨育つかな
 水に浮く薬いっぽんの自尊心か
 聖書読む生きる魚の眼になって
 蛙を焼くやがて魂焼く話

姫路市 榊 原 れい子

波さんぶさんと返す悔い多し
花光のように波間にいるあなた
恋というふいの嵐はもう来ない
キラキラとわが手の中の時間かな
落葉掃く人の心の薄暗がり
胞子飛ぶ母を隠してしまえとや
不発弾私もそっと持ってます
真相のまわりに玉手箱がある
不幸とは封じこまれたビー玉よ
風の街今日も待つ恋をここに

大根を煮ている間けんかせず
幼年期に崩しそこねた砂の山
ていねいにたたまれていく皿の肉
悩み尽きぬ月夜は我を旅立たず
骨までも燃そうか曼珠沙華の赤よ
恋をして女の首はのびていく
量られて売られる豆の一つです
生きがたしこの世に花があふれても
曇天に人の仮面が捨ててある
見極める術たけている友である

四日市市 石 田 寿子

無縁墓洗うひとりの海抱いて
渡り切るまでは包んでいた卵
さくら満開やと前傾から戻る
美貌ではないがフェロモン持っている
いさぎよい落葉だった女の樹
母に話すとせせらぎが返る
金魚水吐く赤い命の音たてて
未来派が大きな靴をはいてくる
スーパードで買った卵が孵らない
魔法が解けるとその辺にいる男

自信があるから攻めるのは後で
心臓を干せと秋天賜りぬ
鎖だと思ふ電話も便箋も
晴れた日に毬はお嫁になるつもり
太陽系のおんなでいつも輪の中に
波のくる前に洗礼受けておく
やがてあなたも独りの淋しさに馴れる
カメレオンある日自分を見失う
食道が狭くて人が呑み込めぬ
狂わねばこの針穴が抜けられぬ

いくさ終る私の影を焚いている
握ってください私の揺れる魂を
裏表知りすぎたのね煮崩れる
舞台暗転仏に顔を借りにゆく
月光に染つてかぐや姫になる
孫を抱くとても大きな未知を抱く
大落暉海よ火傷をしませんか
神さまの軍配通り日が暮れる
内視鏡が霧の階段降りてゆく
喪の写真うつす柔和になる頃に

秋田市 鷺 谷 美津子

その夜の猫は共犯者にされる
キスせねば告白せねば背に火花
学生時代はちょうど古本屋の暗さ
邪悪なる自分も好きだから困る
洗濯機も家具も夫も六年目
夕餉の会話独語と独語かもしれず
真夏日で子は叱られてばかりいる
不戦敗に慣れてしまった長い髪
今のお乳は淋しい味がしませんか
謝罪します君を男に産んだこと

子が泣けばただただ過ぎてゆく時間
幼な子に美しき角生え初むる
白雪姫の母も私も抱く予感
花芽若芽まさぐりながら子を抱く
あんよは上手日ごと新記録を樹立
何の予兆読みたい本が見つからぬ
夫も三十そろそろ首も座ったか
花植えて私の何か癒される
ボinasよ我が家で一泊しておいき
平和な部屋に薄くつもってゆくほこり

青虫も食わぬキャベツを食っている
幸せは睡魔にとけてしまえる日
味噌汁の湯気に住んでる福の神
町内に精神科医がいる安堵
「進出」と書けば誇りが持てますか
待ちぼうけ百合の開花を見届ける
けんけんば女踏み絵を怖がらぬ
織姫も「こまち」に乗って会いに来る
君を見てた教室で道でグラウンドで
青春の空に遠雷鳴り止まず

大津市 中 嶋 ひろむ

透けるもの雲を掠めて落ちてくる
断崖に追いつめられている 翼
ユーモアのルーツよ 母の胎内よ
川上へ桃を流してゆく力
おもちゃ箱からはみ出す肥満児の人形
カレンダーゆっくり走る黒い貨車
パントマイムの別れ 倍速ビデオ
過去の愛打ち明ける 間違ひ電話
バルコニー自殺未遂の猫という
爪を切るびよんびよん跳んでゆく他人

愛欲を三角にして閉じ込める
性愛の水一滴や馬光る
青い性飾るや馬の薬細工
複雑に手足を絡ませる 踊り
家を出たおんな帰ってこぬおとこ
半円の男と半円の女
生命線の切れる辺りで桜咲く
紫陽花の雨を赦している こころ
反省を忘れてまいるいまるい月
絶景を遮る人間の頭

黒山の人の向こうに月が出る
風よ吹け嵐よ吹けと穴の中
処女雪に小鳥の逃げた跡がある
冬星座寓話の汽車を走らせる
人間がいなくてところにある笑い
虫蝶になるまで深く考える
真っ白になって反省している 骨
神棚の高いところに首を置く
ふと死んでいる 幸せは突然に
人間のかたちの虫になっている

小樽市 斎藤 はる香

浄土の道を往ったり復たり母の足袋
脆い絆に母の病が横たわる
かけるたび孤独になってゆく電話
臥して知る風のない日の風の音
誕生月の母のさくらの濃く淡く
老梅の影を仰いでいる姉妹
風花を纏うて母が訪ね来る
易の灯の耳から昇ってくる朝日
人間曼陀羅いっつも愛の板ばさみ
河の向こうへ渡りきれたら母は風

落慶や無垢の浄土の道ならば
璽路の絹さわさわと出会いの日
水子塚恋の形見は池の月
日向三代想いおもしろい水びしゃく
河老いて三枝の札を重んじる
少年を包みきれない高い屋根
崩壊のあおりよろよろ転ぶ父
井戸替えの水に浮いてる計算器
銀行の糸切れ目刺し焼きなおす
花狂れて一味の雨にやすらぎぬ

受話器から花束届く誕生日
還暦へ長寿祝いの保険買う
逃げようがないジャガイモの花が咲く
大根輪切り狂わない手で塩をふる
血糖値と仲良く暮らす曼珠沙華
自惚れを秋が追いつく糖衣錠
仏具屋に時をこぼして黄昏る
ふところに満月いれて編集後記
前略もなく杉村春子のいのちかな
さくら前線夜を閉ざして便り書く

八戸市 笹田 かなえ

黙禱の一分間の水の中
魔女になる呪文は猫が知っている
ひだのあるスカート鳴咽囁みころす
こわれ物注意なんです薄化粧
ラッピングほどの笑顔は作れない
街はずれのポストはきつと逃亡者
銀紙の泣き出しそうな照り返し
だとしても賞味期限は昨日まで
ひき出しは現状維持の半びらき
サルビアの蜜サルビアの口で吸う
なまぎかななまあたかく売れ残る
結末ヘカレライスの皿を置く
リーズンパンちよっとお芝居しているね
ステージは五月の窓辺船が出る
モノクロの視野 私が見つからない
熱気球痛い場所から飛んでいく
くちびるを端まで塗って無口な日
寒月のいよいよ白く機は熟す
おのぞみのものは簾笥の三段目
もしかしたらポストが火元かもしれず

もののけのもうろうとして身を起こす
さつと拭く鏡 そこから鳥が立つ
たましいのぬきさしならぬ月の位置
懐中電灯のゆくさきさきにある暗さ
しょう油差しこの世の汚れベッタベタ
影踏み影はまだある時間割
ハンドバッグパチンと男閉じ込めた
三月の心あたりのある寒さ
陽春の蛇の穴には蛇がいない
天井の鏡に映る物語

東京都 山本 忠次郎

誰れも居ないので仏に声かける
陽炎がいつばい老人もいっぱい
あおむけに並んだ蟬の臨場感
妻は花屋と肉屋に寄って消え
流血の音を見張っている向日葵
空耳にピアスをはずす天使の時間
透明な道の曲角だと思ふ
少しずつ窓を小さくして家
遙眺の舞台に光るたまり水
河豚の毒スキンスキンと冬になる
もつれ糸長い時間を消していく
開腹が長すぎ風も出てくる
ネクタイをゆるめ土の力を見てる
階段を下りてくる明るい貧乏
庭ごと消えてしまふ女の白さ
花庭踏む胎内にうす明り
しばらくは生きてるように揺れている
遠景が白いくびをして消える
農学部を月を背負ってくる老婆
棒になる樹がおじぎしたようだ

からくりは体の方が憶えている
さびしい糞にかけてやる味の素
川底はいろは水面アイウエオ
青空が揺れなにがしか金溜る
いい川だから帽子を投げてあげる
透明なネクタイで来る総会屋
死に急ぐ路携帯電話が歩く
すっかり毛が抜けて人を信じる
母を捨て膿つづける少年期
改宗の糸巻き直すゆうりと

砂川市 大橋 政良

家系図をころがってくる握りめし
小心を偽装している青蛙
貴賓席鳥獣戯画の中にある
桜さくら黒子はピクリともしない
ゴミ戦争 ゴミに敗れるかもしれぬ
芋づるの芋の一つでろくでなし
引き潮の忘れた顔のない帽子
日めくりを剥ぐ指先にふれる 冬
縛られるよろこびもある風の縄
片方を誰も掴んでくれぬ縄

東京の虹に息子をさらわれる
この家も案山子も後継者がいない
亡き母の乳房に送るラブ・レター
ふるさとと桃の流れる川がない
風の絵にひょいと出てくる仏さま
縄電車 脳病院でひとり乗る
沈黙の藪にいのちのメッセージ
原稿紙升目に転び癖がある
チンドン屋この装束で葬ろう
人混みの中でいのちの擦れる音

携帯電話という殺し屋をつれている
但し書き一服毒を盛られそう
但し書きこんな手錠もありました
夢売りが橋のたもとに今日もいる
私に羽化が出来たら鬼になる
わくら葉がひらり霊柩車がおる
大将という哲学を持っている
引き摺った尻尾のあとがついている
自画像に点滅してる非常口
虫のいいお願いします あみだ様

北海道 野村禎子

進化論夕やは綺麗でしたよ
親指だよと云われて親指らしくなる
煮豆ふくら命ふくら生きており
胃カメラ飲んで見ませんかいいえはい
八月十五日煮こぼれている鍋がある
川よ階段をのぼった事がありますか
流水離岸最後は安楽死のはなし
沈めても沈めても浮いて来る首
寂しさが溜ると吹雪にしてしまふ
しりとりをしながら流水着きました

泡だちのいい石鹼本音で生きようね
人ひとり信じて乗った木馬でず
逃げ道を探しています回転木馬
回り道数えきれない風に会い
ポップコーンだった十八才だった私
朝になった羽根をたたもうか
砂時計は決して悲鳴をあげたりしない
一日一回笑うことにする
忘れ上手で今日を大切に生きてます
川下で桃を待ってる春のバス

言い負けて塩鮭の貌になってしまふ
塩をふる冬と仲良くするために
泥つきの葱に呪文は効かぬらしい
粉ふき薯蕷いものねだりはせぬことに
臆病でない証拠に大声で笑う
雑談の中から光る石拾う
カルシウムも愛も不足で眠られぬ
アルバムの貴方はとても饒舌で
フライパンを焦がす女とは哀し
もう武器にならぬ乳房と渡りあう

青森市 福井陽雪

人としてこの世に放り出されたよ
愛という鬼装束を渡される
僕の名をひととき高く石が呼ぶ
家中がこった返して氷点下
運命線に縛られた手で飯を炊く
黙っている優しさもあり牡丹雪
さよならをまあるく円く描けますか
てのひらを返すと人になる形
寒鰯の口真四角に真四角に
一筋の光と生きて生かされて

暁暗や棄てたい物が手に絡む
陽が昇るひよいと私を持ち上げて
荒馬を宥めすかして息苦し
大風を書くこの先の私小説
散り際に乱れるもよし寒椿
ひまわりの種を貪る闇家族
三叉路に立っているのは解体屋
削岩機一本道をまっしぐら
花一輪雪と結婚した人に
もう履けぬ靴を燃やして水浸し

炎のような記憶をなぞる指時雨
孤独死のそばに点けっ放しのラジオ
青空も痛みとなるや無人駅
海へ海へと皆ひょっとこの面着けて
何の列だろう天まで続いている
始まりも終わりも入り江命とは
丁寧な夢を並べる雪の上
土竜が死んだ恋い焦がれてた陽を浴びて
処刑台になるまで白い石を積み
遠い日の指切りに泣け満ち潮よ

西宮市 大熊純三

古稀を舞うラ抜き言葉に囃されて
洪皮をちよびり残し家長の座
電子手帳 まだまだ熱いキーワード
ちちははの馴れ初めを聞く囲炉裏鍋
早春をこつこつ掬う妻の匙
補聴器で確かめてみる四面楚歌
叱ってくれる影なし夜の爪を切る
旗日にも旗のしずかに眠る国
年ごとに亡父に似てくる鬼がわら
埋み火をほうと煽ってハート・チョコ

かさぶたができるまで貼る軽いギャグ
菜の花千里 蝶になるまで遊ばんか
牛歩と牛歩 二人三脚いかです
断末魔のジャンプがつづくむつごろう
渾身のジャンプしかないエピソード
開かずの扉灼き落とせるか夕陽
ヤマトオサガニまだ仁王立ちできますか
クローンからわたしへ恋の果たし状
さよならの数だけひとしとイノコズチ
信じようあんなに夕陽炎えるから

こつこつと山芋を掘るぼくをほろ
偏差値のクレパスに棲むたまごっち
言い勝って夜霧が急に深くなる
地に還るサリーひとひら眩しき白
はくちょうの白吸いつくす空の青
驚になるまで翔ばしつづける紙ひこーき
ジーンズの穴 ちらり二十一世紀
人許す小箱をいつも持ち歩く
ストローの穴のむこうの遠い母
残像にはさせぬ火の鳥ルミナリエ

高知県 山本三香子

ためらいを閉ざす一瞬 真皮まで
プリズムを抜ける青の一群あり
春球根 心がわりが屹立す
ゆきやなぎ溢れる韻に背いても
密約も深夜ひとりの幽となる
あまやかな水脈もあり罌の果て
朱を分かつ荒ぶる神の名のもとに
少年を満たす異教徒の青そして青
残り火に逢う どこまでも曼珠沙華
遊び爪寡黙な夜が好きだった

月満ちる内なる朱を確かめて
無影燈照らした母の他人色
淡きまま鎖骨は夜を駆け抜ける
逢うまでのやさしき手首 染まるなら
目指すもの二人が生まれた夜の残照
愛していたい蒼の扉の閉じるまで
向かいあう男の腕に慈雨満たす
満たされて熟れる指先 万華鏡
君想う同じ強さで牙返す
甘皮を溶かした人よ 緋の記憶

玉蘭の契り 寡黙なふたりを想う
ひたすらに凍土をゆく われも残り火
友の瞳に極彩色生まれ 異国
削き落とす吐息 真実望むなら
さんざめく原野の螢火 祖母に逢う
夫と見る海 木綿の味がする
裏切った日の義父の網膜に逢いたい
白濁の義父が目覚める雨が降る
許されて義父は緋色の風に舞う
うつし絵の父その汚れなき細胞よ

缶ビール冷やして聞いてほしいこと
言い足りぬ思いで春の髪を梳く
雪だけの道にわたしが落ちている
それぞれに父は生きてる一周忌
落ちてくるものは両手で受け止める
語り合う人ははるかに虫の声
ちっぽけな窓から星を見えています
着飾って中味が見えぬようにする
持ち歩くテレカ一枚分の君
引き出しにあしたの忘れ物がある

来年は家族がふえるものがたり
幸せを丸く包んでオムライス
泣きながらこの世におりてくるいのち
幼な児と歩けばちょうちょ赤とんぼ
おとなしい良い子の胸にたまるもの
反抗期母はおいしいお弁当
のみこんだ夢のかけらがつきさる
いまという積木をひとつまたひとつ
ブライドを洗い流してかせをひく
君の手がきつと誰かの役に立つ

一本の花火家族の輪の中で
雑布のもっと汚してほしい顔
亡き父に往復葉書出してみる
女偏だけで私を語らない
疲れてる軍手やさしくもみ洗い
そばに在るだけで吹雪が遠くなる
かえり咲くものに出会ったころの君
幸せをすくう両手が小さすぎ
水たまり空を映して空になる
遠く来て同じ景色の中にいる

鯖江市 天谷 由紀子

風は冷たく水汲む音の激しかり
一枚のシャツたたまれて此の世かな
空が曇っているのほけきよ
満月や花野にひとつあるトイレ
あおむけの蛙だみんな見において
もっと淋しいのは一人より二人
おなか空いて空いてもう何も要らぬ
銀の匙追いつめられて鳥になる
押入れのその又奥の擬音
人を憎むとき満ちてくる力

問いつめてゆけば私に突き当る
にんげんに戻るとこはんの匂い
大根の穴くろぐろと何を見し
冬の空から一枚の請求書
不況えんえん花屋の花を買占める
輪廻転生いま蛙になるころ
妹も此の世の事に気がついて
小さめの靴とだぶだぶの服とわたし
履きつぶしてからサンダル暖かし
厄介なところに窓がひとつある

漏電が始まるみんなわがままで
笑いながら汽車走らせる野菊
いたずらのサララップを使いきる
おはじきと鍋の間にある扉
非常口たしかめ紅葉する
鳥は中空に生も死もまならず
揺れながら泣きながら樹になった
満月になるまで鉛筆を削る
倒れそうな樹だ包帯をしてあげる
花びらを一枚あげる一枚もらう

Z賞は今世紀の究極の扉

橋 高 薫 風

Z賞の審査をするのに要するエネルギーは
底が知れない。それはそうだろう。応募する
作家たちのエネルギーも計り知れないのだ。
一年の間にものさした力作三十句を前に私は
毎年おのれを無にして対処する。無にする
という思いの中には、無心の意味もあれば、
誰もが私より有能であるという畏敬のような
畏怖のような感銘を抱きながら選に当たる。
それは伝統的な作風の私を自覚しながら、
斬新な句風の多くの作品と対決しなければなら
ないからである。教えられながらの選だ。
しかし、中には乱暴な文字、誤字当て字の
交じる、自らの作品をないがしろにしたよう
なのがあるのは、残念と言うほかはない。

木 本 朱 夏

ひまわりの大おとうを思うなり
猫の目に春のランプが点つても
夫婦茶碗に三角波が立っている
時刻表閉じると海は消えていた

豊かな情感からしつとりと重い句を生み、
感性の鋭さと的確な言葉の選択、沈潜した独
自のロマンと、多彩な内容が展開する。「虫
籠に」「あかつきの」も秀作。第一位に推
す。

山 本 磔

もう波の音は忘れた 回遊魚
母を叱る男がひとりいたらしい
黄痘ではないのか壁のモナリザよ
作句歴は一番かと思うベテラン。常に淡々
と句を楽しんでおられるが、叙情に批判に力
の衰えは見られない。「息抜きを」「風流
に」の軽みは氏の独特の味だ。

福 力 明 良

善玉悪玉臓器はみんな美しい
昏れかかる秋に写楽の絵と酒を
内助の功とても静かな雨である
古い情感と新しい意欲がないまぜになった
ところに、この作者の精進を思うのだ。作品

に優劣の差が顕著とも思う。

徳 永 政 二

水の音水は帰りがっている
おおかたの過ぎてしまっている男
樋 口 仁

禁断の実が入ったと本屋から
飲み明かす木っ端微塵になった日は
岡 本 恵

着飾って中味が見えぬようにする
水たまり空を映して空になる
福 井 桂 香

夕暮れは埴輪の口になだれ込む
句読点にてんとう虫を遊ばせる
選外には広瀬ちえみ、宮川蓮子、峯裕見
子、なかはられいこの諸氏が続き、入選作と
は最終決定での微妙な評価が左右した。

Z賞は男女の力の均衡がとれた場のように
思える。狂句百年の弊に目覚め、川柳の質的
向上を目指して百年、今また悪貨に汚染され
つつある現状は必してなおさらに出来ないも
のがある。Z賞の作品で川柳の本領がアピ
ル出来ることを来世紀への希望と致したい。
その意味で、Z賞はAから始まった今世紀
の究極の扉であると言える。

抜群のセンシビリティ

峯 裕見子さん（大津市）を推す

尾 藤 三 柳

あつという間に一六年目、歳月の速さにおどろきつつ、育ち盛りの子供が確実に体重を増していくように、ここまで成長した本賞の存在感を、うれしく、たのしく、またいとおしく実感している。

過去十余年間、参加作品は少しずつ変貌を見せてきたが、今回手許へ届いた一〇七点・三二一〇章の作品には、やはり時代を反映した川柳界の嗜好や傾向が見てとれる。

*

それぞれ三〇章の作品で、どれだけ自己をアピールできるかは、作家個々の平均的な力量より、その三〇の中に自己をどうパッケージするかという、作品の選択に大きな比重がかかっている。

ひとたび選択を誤れば、個としての作家的能力はカラ回りするばかりで、単句に見るべきものがあっても、全体としての世界に埋没してしまう。自選作品のむずかしさである。

第一次予選通過の三四点中、一六点はおおむね右の理由で割愛、残りの一八点から一三点に絞るのには、それなりの苦労をした。その過程で気がついたのが、ほとんど無意味な助詞「や」「よ」「かな」の多用と、入選作家を含めての「私」「わたし」「わたくし」の大会唱である。これが流行というものなら、すみやかに去ってほしいと思う。

*

特選に推した峯裕見子さん（大津市）にもそうした流行性湿疹のごとき一面が見られるが、何よりも視角がおもしろく、コトバにしなやかな弾性がある。ことに、漢字・平仮名の配置の一字もゆるがせにしない一句一句の表記は、類を抜くみことまで、背後に作者のただならぬセンシビリティを感じさせる。

*

予選通過者へはコメントするスペースがないので、目についた単句だけを掲げておく。

想と感覚のひろがり求めて

細 川 不 凍

俄万智の短歌がブームになると、川柳でも女性作者を中心にライト感覚の作品が流行した。また、「三月の甘納豆のうふふふ」という俳句が話題になると、これに類した川柳が散見されるようになった。このように川柳は他文芸の影響を受け易いが、反対に、川柳が他文芸に影響を与えたというのは寡聞にして知らない。川柳が他文芸よりも立ち遅れている証でもあるのか。川柳自らが想のひろがりや感覚のひろがり求めているかなければ、この隔たりは埋まりそうもない。そういう意味でも、清水かおり、なかはられいこの二氏の作品は注目に値すると思った。

《特選》清水かおり

起きてくるナイフ此岸の雨音に
孤を揚げわれら夏色の文様

永遠と書くゆうれいもかりうども

この作者は自分の思考、自分の方法、自分の文体で川柳を書き切っている。そういう精神の勁さが、女性作品にありがちな舌たらい

抒情を払拭させているのであろう。持ち前のシャープな感覚、瑞々しい抒情を最大限に活かすためにも、恣意的に句を成すのではなく、主題性を持って句を書き続けてほしい人だ。

《秀逸①》なかはられいこ

足首をゆるくつないで眷属よ
夜の滝いままうしろを振り向けば
私たちが微量の花粉散きながら

昨年よりも充実した作品群、特に襲の部分を取り込み、俗のエネルギーを発散させつつも、下品に墮すことのない作句手腕の芽えに瞠目した。独自の眼の働き、生き生きとした句の表情、そのどれもが現代を呼吸している。

《秀逸②》渡辺 和尾

桃・桜 開いて 象の親子の絵
目を開けてこの世見ているときの象

「象の背中」が読んでいて最も愉しかった。平穏な作風の底に、ほど良いユーモアを湛え、親しみに満ちた表情を見せている。作者には手慣れた表現かも知れないが、改めて

待つときは北京オペラの眉になる
手の中の扉を押して汽車に乗る
雲を一つ買って交際費でおどす
さびしい糞にかけてやる味の素
面白いように転んでばかりいる
てのひらに溺れる猫を飼いつづけ
蒼だ蒼だ蒼だ かくれる場所がない
七ペーじあたりの僕が面白い
仏具屋に時をこぼして黄昏る
大根も牛蒡も切ってさてあなた
絵本の片隅 水の匂いと象の匂い
一椀の月と流れる紙の舟

千里 柳女 醉月 忠次郎 すみこ 桂香 礼子 栄一 はる香 れいこ 和尾 かずこ

読者を愉しませるコツを心得た懐の広さを感じた。

《秀逸③》柴崎 昭雄

両手さらして置いてけ堀は晴天なり
病室に凜と立ちたる葦の刻

特殊な境遇にある作者だが、それを突き詰めることによって、普遍的な人生の哀歓を詠うところまで表現は振幅を広げ、内実は深化した。また「ほうほうと月下をゆくは解体屋」の諧謔には精神的に逞しくなった作者を見た。

佳作に推した十二氏の、その作句伎倆も手応えは十分、次回の更なる飛躍を期待したい。最後に選外からの感銘句を掲げておきたい。
青紫蘇にくるんでハイという言葉 あや子
この子かげろう母もかげろう水部落

母になることはなかった観覧車 礼文
綾取りの指のすきまの孤雨 朱夏
臥して知る風のない日の風の音 はる香
前日は握り返してくれた指 海
雨傘をはみ出すように骨壺は 泰章
雪撥ねて四十四キロ発光す 千繪
船は出てゆく寒月の飯茶碗 弘子
臨月にあわせて決める髪の大 蘭

選 後 感

吉 田 健 治

特選 西秋忠兵衛

今回の特選の決定では大分迷った。西秋忠兵衛氏が柴崎昭雄氏かで。どちらも力量では遜色なかった。忠兵衛作品の特色は先ず文体の切れのよさ、時事性、諧謔等であろう。パランス感覚のいいのも特徴の一つだ。

保線夫が自分の影を打つ秋だ
それその男のなかの淹の音

次の作品に更なる可能性を感じた。

あらっ秋ね そうだよたまごっちの少女

秀逸① 柴崎 昭雄

ほうほうと月下をゆくは解体屋
全身を風に晒すと冬の笛

雪こんこん寝太郎ひとり青のまま

昭雄作品を読む時、まずその境涯を思い浮かべるが、その背後にある風土にも深く思いを致さねばなるまい。今回は新しい境地を拓いたように感じた。「錠剤を飲み込む喉のサンバかよ」「葉の花の家族もろとも笑い講」そして次の作品に新しい昭雄の誕生を見た。

受話器の母の空は晴れたかサボテンの花

秀逸② 渡辺 裕子

裕子作品に出会えたのが今回の収穫であった。ケレン味がなく、だれにも分かる平易な言葉で自分の内面を見つめながら、声高でなく、素直に、表白している。非常に好感を持った。

坐りなおして遠のくものを聴いている
戸を閉めてからゆっくりと光り出す

地味でともすれば思いたらないようなこととがらを掲げ上げて、ていねいに作品化している。これから期待している。

秀逸③ 広瀬ちえみ

ちえみ作品のユニークさは誰にも真似が出来ない。裕子作品とは好対照であろう。

次の作品に注目した。

誰もいない部屋で入道雲を産む
断崖に簞笥・鏡台並ばせる

割箸を架けて「渡って来い」と言う

ちえみ作品に現代詩人の藤富保男の手法が

同えるが、よく消化して移植しているので、独自のちえみワールドを展開している。これからに注目している。

次に心に残った作品を。

一本線を書くゆっくりとぶらさがる

世紀末の空洞を出る毀れた楽器

枕種の括りにいたす父の骨

業の毬 時にほうずき時に月

けもの道たどれば父の焚火跡

家中の刃物を研いでいる日暮れ

四温陽だまり柑橘系の文庫本

携帯電話という殺し屋をつれている

病人の枕の横にある枕

息子のそらでわたしが泳ぐ 夏の朝

毎日が日曜 虹たんだでは伸ばしては

モナ・リザの視線の先に佇っている

劇場の座席が一つ森にある

メビウスの環に逃亡者がひとり

彩愛 洋子 眞里子 雄策 京子 紀子 政良 恒雄 初音 蓮子 和子 流青 美文

選 後 評

酒 谷 愛 郷

今回ほど選考に苦慮を要したことはなかったが、その結果特選には、このところ一段と、作品の鮮明さを増した新進の清水かおりさんを推した。

作品には作者のみずみずしい感性を惜みなく発露されている。どことなく絵画的手法の感さえあって、蒼々と読み手を包みこんでしまう作品である。

月柱さみしい人は車座に

誰を壊そうか某の海のたくらみ

両頬をはさんでひそと空の話を

板東弘子さんは、清水かおりさんの凛とした色彩感覚は無いが、地味な作品の佇いの裏で、気丈にも自我をいとおしむ作品をみせる。

只今回の作品には、言語選びの呼吸の乱れが見えるが、そのことは賢明な彼女には充分判っていることであろう。

錠剤ころがす吾に射しくる月の光

月光や膝に祈らば風の櫛

草笛を振り向く何時まで亡父の呼吸

島道代さんは、今回上位からやむなく外した柴崎昭雄さんと同様に、上手さが先にたつて、そのために、真実味を他者へ伝えることの懸命さが、やや薄らぎはしないかと思った。

草木染めこころを春の野に晒す

辻ことの風に縫えば草いきれ

くぐり戸を一枚ぬける春の手火花

大谷晋一郎さんは今回初めて秀逸に推した。

この作家の地道ながらも、自己の生活に根ざした作風には瞠目できる。

まだ強引とも思われる言語の選びには、今後に留意されて、事の単なる表白でない事象を語れる作家として増々精進してほしい。

身を半分にあふ老婆の山つつじ

婆ねむる座敷に昼のかたくり粉

祭り日に生れたる魔屋のありはあり

吾が郷土在住の中島虎彦氏は、「障害者文学」の文中に「言葉を取つては、自己

をも取つけることと同じである」とふれている。同じ立場からの言葉として、こころして私も聞く思いである。

今回何名かの境涯を主眼に置いた作品にふれながら、その事がなよりの自己救済としながらも、いかに他者へ良質な作品として、真意を提出できているかと想うときに、境涯作品を書く立場の私としても、その厳しさと難しさを感じた。

自己の境遇に愁える日のあることは、いかんともしがたいとしても、けっして怠れた詩精神で自己を表白しないように、自らも戒めて選を終えた。

その他の作品

両手さらして置いてけ堀は晴天なり 昭雄
君がきよう来る千葉県が晴れている 忠兵衛
欠伸して人生少し軽くなり 道夫
戻観音師を戻して柔らむ慈眼 陽子
陽が昇るひよいと私を持ち上げて 陽雪
音楽のような少年汽車に乗る 流青
今すこしうつつの空を手のひらに 政旗
性愛の水一滴や馬光る ひろむ
この世からしばらく離れ煤だらけ 千里

自らの躰に刻み込む作品を

佐藤 岳 俊

銀河系の中で、人間と同等ほどの高等生命が現在という時空でいくらぐらい存在するものだろうか。この方程式をコーネル大学のフランク・トレイクが作った。それによると、約千個も存在すると言われる。宇宙は人間を創った。その人間はどこへ向かっていくのだろうか。現代川柳はなぜ創られるか。ひとつ言えることは、自らの躰から生まれ、躰に刻み込む作品が欲しいからである。

特選 宮川 蓮子

あずき粥あたしを置いて逝きんさった
遺されて匂いのしない時を抱く

野原茫々ひとりの膳に降る水雨
死に場所を求め続ける現住所

愛する人の死へ向かって、激しく生き返る生を刻んでいる。見慣れた日常の小道具も躰全体で攜んでいる。

秀逸① 広瀬 ちえみ

ふつつかなマーガレットをさしあげる

断崖に單筒・鏡台並ばせる
日常に挫折しながら、その底に沈溺するものを抱きあげている。険しい歩である。

秀逸② 柴崎 昭雄

春の樹もわれもはげしく産声す
父も子もさてもけもの形の形をして

産声は人間に生れた叫びだったが、いつまでも生の源として求めつづける息がある。

秀逸③ 岩崎 眞里子

しあわせを問いつづけてる虫の声
細胞のひとつひとつにいるあなた

受精卵細胞が分裂をくり返して異った細胞が生れた。精神を生む脳細胞を追っている。

岩手県岩泉町の瓢箪穴遺跡から、五万年前の遺構が発見された。中期旧石器時代の遺構にはスクレパーや尖頭器、獣骨等が出土している。この遺跡が注目されるのは、アルカリ性の土壌であることから、ネアンデルター

ル人と同じ石器時代の「旧人」の骨の発見が期待されているからである。
さて、Z賞に集積された川柳作品は自己との戦いにおいて、激流へ向かったものが少なかった。

その中であって、自分の方向をしかと握りながら、いつ倒れてもいい気流を持った作品が私の中に残ったのである。作者自らが、自己という原野に刻み込む作品群である。
その一群を最後に掲げたい。

道代 落日に縋る病母も枯れ菊も
京子 頷いた首から向日葵が枯れる
れい子 不発弾私もそと持ってます
美和子 殺意などないのに花の首落ちる
礼子 全身の毛を逆立てて桃孕む
れい子 月光が洩れてる君の肋から
弘子 真夜中の秒針を聴く枯木いっぽん
和香 葉ざくらと同じ寂しさ抱えている
トキ 流水の女と言われてから哭かぬ
三千子 いちまいの闇を躰に捲いてゆく
忠兵衛 いっぱんの柘榴は青しチェ・ゲバラ
紀子 ゲリラが仆れている辛夷が咲いている

一句の広がり収斂

岡田 俊 介

よって、読む人の胸に響かせている。

立原みさとさんの作品は、四年前に比べて作品の密度が増し、目を見張る変貌を遂げている。感覚によって句を構成する魅力を得ていて「縋る手をほどけば闇が匂い咲く」に見られるように、日常の素材を妖しいまでに昇華させてゆく作品にそれを確認することができる。

辻村みつ子さんの哀しみは、飾らぬながらも的確で丁寧な表現によって、悲痛なひびきを伝えてくる。「白牡丹刻は流れていくばかり」の白牡丹の白い美しさに反比例するように増幅される無常感は、透明感をも漂わせて迫るものがある。

木本朱夏さんの言葉には力強さがあって、作品に安定感があった。「パレレンの足音うしろから時雨」の一連の旅の句が面白く読めた。「猫の目に春のランブが点つても」にイメージ化の手法が見られ、変貌する作家像がある。作家は変貌しなければならぬ。菌切のよい表現と抒情との係わりが、特徴的で

ある。
姫乃彩愛さんの作品は、粒揃いとも思われないが、例えば「十指より光放ちて陽炎の病父」のごとく、磨かれきっていない感性の柔軟さを窺わせて楽しみである。
その他感銘を受けた作品を紹介する。

乃理子 小鳥の死イコール鳥形の空虚
幸子 片頃は夜叉に差出すおぼろ月
すみ子 母を訪うたらだら坂の萩つばき
裕子 落とした箸のさきに月光あつまって
三千子 暁は泣き出しそうな薔薇になる
はる香 ふとこゝろに満月いれて編集後記
眞里子 こころの実ひとつ挽いては影売屋
政二 結界の向こうも同じ木が匂う
真子 戒名をならべて遊ぶ白葵
タカ子 鳥葬の鳥の行方の茜雲
正治 螢という名の女あり明くて
蓮子 三彩の馬でもうじき逢いに行く
悦子 流転かな空壕一個転がれり
裕見子 父が居そうな月の夜の製材所
流青 あさましき顔して吸る朝の粥
敦子 いのち揺れます夕昏れの目のにこり
桂香 惜別の鱗一まい貼るてがみ
礼文 手品師の帽子のなかの生年月日
圭子 哀しみの極みは夾竹桃の 赤

川柳の夜が更ける

寺尾俊平

第十六回Z賞の選を終了した。なんと十六年間選も続けていたわけである。

そして今回の挑戦を拝見した。

今回の特選には和歌山の木本朱夏を推す。

朱夏の作品は伝統川柳の本流を行く作家そのものである。しかも未成熟である。ただ何かを掴もうとする気迫が伝わり、去年より確かな把握を評価する。

時刻表開けると海は消えていた
旅人として熟練の群の中

秀逸①はなかなはれいこを推す。

彼女の特異な情感が句の中に流れるようにある。ただ別し書の使用に若干の疑義はあるのだが、この作家の無抵抗主義のようなものを毎年感じる。

街中の携帯電話が鳴る 桜

私たち微量の花粉撒きながら

秀逸②に柴崎昭雄を推す。

身体障害の車椅子の生活を続けている、ハ

ンサムな青年である。すばらしい家庭愛によって昭雄は支えられている感じの作品が、主流を占めている。ここから脱却してより詩的な思想を書いてもらいたい。

錠剤を飲み込む喉のサンバカよ

全身を風に晒すと冬の笛

秀逸③に梅崎流青を推す。

もうすでに受賞しているいい筈の作家である。

それがいつも次点だの、次々点になっているが作品が案外なほど優し過ぎるのがイケナイと思う。九州の梟としてゴツウなれ。

焚火の火消え覆面に囲まれる

草に寝て五体をひとつずつ外す

佳作の①に福力明良を推す。

最近めきめきと力をつけて来た作家である。なにか賞を貰ってかららしいが、刺戟はひとつの成長剤である。と、同時にわが岡山のホープとして期待されている彼である。

戦いが終わった後の風の音

ジェラシーがゆっくり動く秋の雲
以下、佳作の作家諸氏の作品を記録する。

佳作の②に徳永政二

おおかたの過ぎてしまっている男

佳作の③に西秋忠兵衛

買ぶくろがひとつ男がひとりいる

佳作の④に宮川蓮子

不謹慎な鳩らと遊ぶ一周忌

佳作の⑤に大橋政良

東京の虹に息子をさらわれる

佳作の⑥に佐藤良文

メビウスの輪に逃亡者がひとり

佳作の⑦に戒踊兵

枯れ草を千本描いて父の葬

佳作の⑧に樋口仁

禁断の実が入ったと本屋から

佳作の⑨に坂東乃理子

鳥魚虫にも心ありて冬

以上、選評みたいなものを書かせていただいたが、闇の声はもう真実の川柳の時代は終わって、マスコミの低俗な拍手に尾を振るのが現代の川柳だという。解るような気がする。後年、現代が化石時代になったとき、川柳の句の価値付けをどうするか楽しみである。

ある選後感

片柳哲郎

演出家の蛭川幸雄は「作家の文字は書くの

ではなくて、いのちを彫み込んでいるのだ」と言う。この言葉を厳粛に受け止めたのは私

だけではないと思う。短詩型作品である川柳

はそうした姿勢のものでありたいと思う。

本年度も一位に推奨した島道代氏の作品

は、まさにこれに該当し、一字一語にいのち

を彫み込んでいる。薄っぺらな技巧などとは

違う、永遠に生き残るべきものがある。人が

敢えて立つと言え、必ず底下のかなしみを

踏まえて立つものであって、その嘘偽りのな

いものの中に評者として浸りこんで、悔いる

ことのない本年度の島道代作品であった。

板東弘子氏の応募作品は、手の届くような

場所に冴えた冷たい輝きをみせる一連であっ

て、昨年度より更に内意の質量を感じた。何

故川柳としたかが良く理解できるもので、

切々とした心のメッセージがある。奇をてら

い時流におもねり、見た目を飾る現代の傾向

に対峙するものとして、この地味でひそやかな一編に肯定的な思いを持つ。その一例として

船は出てゆく寒月の飯茶碗

を挙げておく。

弘子

青い絵の中で青溶く王に逢う

かおり

清水かおり氏のメタフォアの対象として採

用される表現の言葉は、新鮮でかつ美の論理

を失っていない。川柳と言えども芸術の範疇

に入る以上は、究極的に残るものは「美」で

あって、美の論理に触れ得ない句が果たして

作品として永らえるものだろうか考える。

青森からZ賞受賞者が出てほしい願いが私

にはあるが、いつも候補には上がって本賞を

逸する柴崎昭雄氏は、今年もあと一歩で一位

には推し得なかった。読んで面白いのだが、

いわゆる誇張された言葉の「旨さ」の強調が、

底辺の質感を軽くさせていた。惜しいと思

う。他の作家の作品にも触れたいが、紙数の

関係でそれが出来ない。だが、失礼ではある

が私のノートに残すべき作品として次の二十
二句を最後に再掲させて頂きお許しを乞う。

白牡丹刻は流れてゆくばかり

一家して片付けにゆく墜落機

春は沖から招待状は隣から

うすい肋よりカラスの街を歩いてゆく

黒山の人の向こうに月が出る

てのひらの愛むすんだりひらいたり

ひまわりの種を貪る闇家族

在ることの危うさを抱く秋を抱く

深々と夜空に置いた人から傘

さつと拭く鏡 そこから鳥が立つ

青竹をまず突き刺して海の祭

すこうんと月むかし白首屋のあたり

夕暮れは埴輪の口になだれ込む

青い崖ながらラスの馬にまたがって

この世からしばらく離れ煤だらけ

花舟を押す累々と母の業

月光が洩れてる君の肋から

傾いた椅子飛んでいる明けの空

幾度の満月狂れるかぐや姫

風景のわずかに動く無人駅

施しや脚を伸ばして鳥は死ぬ

紅椿 ひとりの女より知らず

千 絵
ひろむ
典 子
陽 雪
柳 女
廬 一
かなえ
流 青
蘭
桂 香
洋 子
千 里
りつ子
れいこ
拓 郎
けい子
悦 子
礼 子
礫

選 後 感

八 坂 俊 生

何度か読み返して最後まで残ったのが二十一名の作品だった。その中から特選一、秀逸三、佳作十二を選んだ。

昨年のZ賞大賞の受賞者、樋口由紀子さんが「わかる」ということと題して書いている（「川柳新京都」一一九号）。

川柳の鑑賞や選評において「わかる」というのは、句の内容がわかることらしいが、内容ではなく感性で理解できることもあるのだ、と由紀子さんはいつている。

その最後の段落では、俳人堀本吟氏の「定型詩の最高の快感は言葉にならぬ不定型の意識を言葉の表現形式にして差し出したときである」という言葉をあげて、「言葉というものが一般社会とはまた別の感覚のものになりうるということを川柳人ももっと知るべきではないかと思っている」とエッセイを締結している。

まずはじめに樋口由紀子さんのエッセイのことを書いたのは、Z賞応募作品に、全体的

な印象として「言葉の洪水」を感じたからである。由紀子さんがいうように、言葉とい

ものは「別の感覚のもの」になりうるのであるが、それがうまくいっていないために言葉の洪水が起こっているのではないか。洪水は時として作者の存在を流してしまふ。

普通の言葉が詩の言葉（由紀子さんのいう「別の感覚のもの」）になる。作者の側からいえば、普通の言葉を詩の言葉にするためにはどうすればよいのか模索する必要があると思う。それは詩的（と思われる）言葉を使ったり、川柳界の流行語を俳句の季語のように用いたりすることではない、と思う。

○西秋忠兵衛（特選）

肉体をつれてベンチに腰かける

抜歯の痕冬晴れ とおいへりコブター

遠足の五〇年後の葬の列

○山本 礫（秀逸）

冥界はすぐそこにあり 螢とぶ

母を叱る男がひとりいたらしい

○白藤 海（秀逸）

ヒヤシンスこの世の色をもち始め

前日は握り返してくれた指

○坂東乃理子（秀逸）

ひざの穴じつと私を見続ける

公園の少女の話全部嘘

次に、佳作、準佳作の中から。

好き いいえ 万緑に歯をくいしばる

礼子

夫も三十そろそろ首も座ったか 美津子

蔵書印押して書棚に眠らせる 小吉

十九歳のくちびるのような春です 和子

茶漬け食うひとりの海をゆらしつつ 昭雄

錠剤ころがす吾に射しくる月の光 弘子

体臭の残る帽子を父から子 流青

ひまわりの丈おどうどを思うなり 朱夏

少年の指めがねには白鳥座 眞里子

蒼 天

清 水 かおり

物事を自然体で行うということに、大変な精神修養が必要だと気付いたのは何歳の時だっただろう。躁鬱の激しい青春時代に経験した理想との断絶は、ナイフの切っ先のような感覚を残したまま心に深く沈んでいった。

そして、はじまる日常は永遠に日常である。自身に枷としての「日常」を強いる時、密かな死がくり返されていく。

真白い骨蒼天を給わりぬ 海地大破

六年前、非日常への扉は突然に開かれた。鮮やかな言葉の織りなす風景に囚われていくのと同時に、解放を示唆する声が聞こえた。

私は川柳の持つ造形美にあこがれる。十七音で手に入れる禽獣的感覚をたのしみ、自分という現実をフレキシブルな空間に放射することに没頭する。結局、自分自身を愛するために川柳を書いているのかもれない。が、自然体との摩擦はしだいに薄らいでいる。

かけがえのない六年間とこれからも導き続けて下さる方々に心より感謝を致します。

炎を抱いて

木 本 朱 夏

旅が好きである。見知らぬ街の風に吹かれている時、生きている喜びを実感する。

駅が好きである。朝夕のラッシュの駅、閑散な昼の駅、また無人駅、駅を通過してゆく人々に人生の切なさ愛しさを感じてしまふ。

川柳が好きである。人生の旅の途上でふと出会った道連れ。質の良くない恋人のように時には私を苦しめるけれど、川柳を離れて私の人生は考えられない。

干涸びたレモンのように何年もスランプで苦しんでいた私に、思いもよらぬ風炎賞でした。詩性川柳、伝統川柳、本格川柳、いろいろありますが、私にとって川柳とは生きてゆく日々には不可欠な栄養素、ビタミン愛である。

風炎賞という名誉ある重荷を背負い、これからも私の歩幅で歩いてゆきたいと思います。

本当にありがとうございました。

秀逸	秀逸	秀逸	特選	佐藤 岳俊 選	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	酒谷 愛郷 選
岩崎 眞里子	柴崎 昭雄	広瀬 ちえみ	宮川 蓮子	新潟市	姫路市	名古屋市	大津市	札幌市	柳川市	和歌山市	青森市	高松市	岡山市	堺市	八千代市	青森県	高松市	青森市	香川県	土佐市
佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	岡田 俊介 選	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
石田 寿子	姫乃 彩愛	なかは らいこ	柴崎 昭雄	島道代	大谷 晋一郎	木本 朱夏	辻村 みつ子	立原 みさと	清水 かおり	伊藤 紀子	西秋 忠兵衛	吉田 三千子	岩間 トキ	あべ 和香	板東 弘子	なかは らいこ	高鶴 礼子	渋谷 美和子	榊原 れい子	鎌田 京子
四日市市	豊中市	名古屋市	青森県	青森市	高松市	和歌山市	岡山市	土佐市	土佐市	苦小牧市	八千代市	名古屋市	網走市	花巻市	香川県	名古屋市	新潟市	姫路市	仙台市	青森市
秀逸	秀逸	特選	片柳 哲郎 選	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	寺尾 俊平 選	佳作	佳作	佳作	佳作
清水 かおり	板東 弘子	島道代	青森市	坂東 乃理子	樋口 仁	戎 踊兵	佐藤 美文	大橋 政良	宮川 蓮子	西秋 忠兵衛	徳永 政二	福力 明良	梅崎 流青	柴崎 昭雄	なかは らいこ	木本 朱夏	斎藤 茂生	板東 弘子	山本 鏖	京都市
土佐市	香川県	青森市		加古川市	四日市市	青森県	大宮市	砂川市	新潟市	八千代市	守山市	岡山市	柳川市	青森県	名古屋市	和歌山市	青森市	香川県		

秀逸	秀逸	秀逸	特選		佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選		橘高
徳永	広瀬	本多	峯	尾藤	峯	岩間	竹内	鎌田	佐藤	白藤	桑原	戎	大熊	福井	岡本	樋口	徳永	福力	山本	木本
政二	ちえみ	洋子	裕見子	三柳	裕見子	トキ	すみこ	京子	美文	海	道夫	踊兵	純三	桂香	恵仁	政二	明良	礫	朱夏	薫風
守山市	仙台市	松原市	大津市	選	大津市	網走市	松江市	仙台市	大宮市	西宮市	堺市	青森市	西宮市	和歌山市	水海道市	四日市市	守山市	岡山市	京都市	和歌山市
佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選			佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
梅崎	伊藤	岩崎	鎌田	情野	佐藤	樋口	島	渡辺	柴崎	渡辺	な	清水	細川	普川	天谷	清水	岩崎	桐越	樋口	加藤
流子	紀子	眞里子	京子	千里	幸子	仁	道代	裕子	昭雄	和尾	は	かおり	不凍	素床	由紀子	かおり	眞里子	千繪	正治	蘭
柳川市	苫小牧市	黒石市	仙台市	姫路市	札幌市	四日市市	青森市	北海道	青森県	愛知県	名古屋	土佐市	選	市川市	鯖江市	土佐市	黒石市	北海道	名古屋	札幌市
			佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選		佳作	佳作
			峯	樋口	高鶴	野村	清水	高田	横澤	情野	笹田	山本	な	普川	広瀬	渡辺	柴崎	西秋	吉田	吉田
			裕見子	仁	礼子	禎子	かおり	政旗	あや子	千里	かなえ	忠次郎	は	素床	ちえみ	裕子	昭雄	忠兵衛	三千子	旗
			大津市	四日市市	和光市	北海道	土佐市	札幌市	八戸市	姫路市	八戸市	東京都	名古屋	市川市	仙台市	北海道	青森市	八千代市	名古屋	札幌市

川柳 Z大賞受賞者

- | | | |
|-------|---------------------|-------------|
| ①第1回 | 昭和58年「1982（昭和57）年度」 | 細川 不凍（北海道） |
| ②第2回 | 昭和59年「1983（昭和58）年度」 | 酒谷 愛郷（伊万里市） |
| ③第3回 | 昭和60年「1984（昭和59）年度」 | 古谷 恭一（高知市） |
| ④第4回 | 昭和61年「1985（昭和60）年度」 | 西 山茶花（岡山市） |
| ⑤第5回 | 昭和62年「1986（昭和61）年度」 | 海地 大破（高知市） |
| ⑥第6回 | 昭和63年「1987（昭和62）年度」 | 桑野 晶子（札幌市） |
| ⑦第7回 | 平成元年「1988（昭和63）年度」 | 金山 英子（神戸市） |
| ⑧第8回 | 平成2年「1989（平成元）年度」 | 長町 一咲（岡山市） |
| ⑨第9回 | 平成3年「1990（平成2）年度」 | 西条 真紀（岡山市） |
| ⑩第10回 | 平成4年「1991（平成3）年度」 | 加藤 久子（岩沼市） |
| ⑪第11回 | 平成5年「1992（平成4）年度」 | 石部 明（岡山県） |
| ⑫第12回 | 平成6年「1993（平成5）年度」 | 吉田 浪（岡山市） |
| ⑬第12回 | 2作家 | 荻原久美子（東京都） |
| ⑭第13回 | 平成7年「1994（平成6）年度」 | 渡辺 和尾（愛知県） |
| ⑮第14回 | 平成8年「1995（平成7）年度」 | 金山 英子（神戸市） |
| ⑯第15回 | 平成9年「1996（平成8）年度」 | 樋口由紀子（姫路市） |
| ⑰第16回 | 平成10年「1997（平成9）年度」 | 清水かおり（土佐市） |

風 炎 賞 受 賞 者

- | | | |
|------|--------------------|---------------|
| ①第1回 | 平成5年「1992（平成4）年度」 | 荻原久美子（東京都） |
| ②第2回 | 平成6年「1993（平成5）年度」 | 佐藤 岳俊（岩手県） |
| ③第3回 | 平成7年「1994（平成6）年度」 | なかはられいこ（名古屋市） |
| ④第4回 | 平成8年「1995（平成7）年度」 | 柴崎 昭雄（青森県） |
| ⑤第5回 | 平成9年「1996（平成8）年度」 | 梅崎 流青（柳川市） |
| ⑥第6回 | 平成10年「1997（平成9）年度」 | 木本 朱夏（和歌山市） |

佳佳佳佳佳秀秀秀特
作作作作作逸逸逸選

佳佳佳佳佳佳佳佳佳佳佳佳佳秀
作作作作作作作作作作作作作逸

情東島驚高坂白山西八
野川田谷鶴東藤本秋坂
千和小美礼乃忠俊
里子吉津子子海録生

姫戎横斉高大宮野山伊岩木柴
乃澤藤田谷川々本藤崎本崎
彩踊あやはる政晋蓮圭三香紀眞朱昭
愛兵子香旗一郎子子子子里子夏雄

姫伊東秋和加西京八千選
路勢京田光古川宮都代
市市都市市市市市市市

豊青八小札高新和高三苦黒和青
中森戸樽幌松潟歌知小牧石歌森
市県市市市市市市市市市市市

【歴代選考委員】第一～十六回

大細柴杉山奥泉岸時片尾寺橘
野川田野村室本実柳藤尾高
風不午草数淳吟新哲三俊薰
柳凍朗兵祐市夫一子郎柳平風

(新(北(島(青(東(東(福(大(兵(神(東(岡(大
海道根森京京岡阪庫川奈京山阪
潟)(道)(根)(森)(京)(京)(岡)(阪)(庫)(川)(奈)(京)(山)(阪)

佳佳佳佳佳佳佳
作作作作作作作

木峯岡梅板柴なかはられいこ
本見崎東崎昭
朱裕阿流弘昭
夏見子衣青子雄

和歌大水柳香青名古屋
山市津戸川川森屋
市市市市市市市

(入選句集をお送りいたします。)
西佐工八岡高岩酒桑吉田森福
条藤藤坂田田村谷野田口申島
眞岳寿俊俊寄憲愛晶健麦恵真
紀俊久生介治郷子治彦美澄

(岡(岩(青(香(大(青(京(佐(北(東(熊(大(東
山手森川阪森都賀道京本阪京)

第17回川柳 Z 賞作品応募要領

【応募作品】創作30句を12組（10名の選者・事務局・校正用）

1998（平成10）年発表作品か未発表作品（原則）

【締 切】1999年1月31日消印まで（☆応募者名簿は発表しません）

【選考委員】

細 川 不 凍（北海道）	佐 藤 岳 俊（岩 手）
尾 藤 三 柳（東 京）	吉 田 健 治（東 京）
片 柳 哲 郎（横 浜）	岡 田 俊 介（大 阪）
橘 高 薫 風（大 阪）	寺 尾 俊 平（岡 山）
八 坂 俊 生（香 川）	酒 谷 愛 郷（伊万里）

【応募用紙】B4専用紙。ワープロの方は専用紙に準じて下さい。用紙の必要な方は、返信用封筒を同封の上事務局まで。専用紙以外（や感熱紙）での応募はご容赦下さい。

【参 加 費】不要です。が、入選句集希望の方は¥1,500（送料発行所負担）を振替など（切手・券不可）でお送り下さい。

【速報・5月予定】

参加者で希望の方は、受取人の住所氏名入り返信用官製（に限ります）ハガキを応募時に同封して下さい。

【 賞 】大 賞	津軽塗り記念楯（副賞15万円）	1 名
風炎賞	（奨励賞として）津軽塗り記念楯	1 名
優秀賞	テレカ	若干名

【送付と問い合わせ先】

030-1303 青森県蟹田町145

川柳 Z 賞事務局 TEL・FAX共 0174-22-3537

【振替口座名】川柳 Z 賞 【口座番号】 02350-5-2718

★Z賞テレカ（50度）を¥1,000（送料共）でお領けしています。FAXまたはハガキで申込み下さい。

第十六回川柳 Z 賞入選作品集

発行日 一九九八年八月十五日

編集人 南 野 通

発行人 高 田 寄生木

発行所 川柳 Z 賞選考委員会

〒〇三〇一三〇三 青森県蟹田町一四五

☎〇一七四二二三五三七（FAX共）

振替 一、五〇〇円（送料発行所負担）

口座 〇二三五〇一五二二七八

印刷所 青森市大字幸畑字松元六二一三

TEL 〇一七七（三八）二〇二一

【事務局より】

選考委員の皆様、応募の方々の協力を得まして第16集が出来ました。厚くお礼申し上げます◆編集・校正を今年も南野・山田・岩崎さんご夫妻のお世話になりました。併せてお礼申し上げます◆毎年書きますが、次世代の作品を模索しております。選者の皆様にも思いきりのいい作品を見て戴くようにお願いしてあります◆大賞作家も応募の形でご支援下さい（発表誌代や速報ハガキは不要です）◆誤字訂正、作品変更は改めて12枚送って下さい。（杉野 草兵）